

# 関東学院 学院史資料室 ニュース・レター

No.21

2018.3

学院各校の創立の頃  
『坂田記念館』特集

## 目次

はじめに	2
関東学院とYMCA活動	3
学院各校の変遷（1884-2017年）	6
関東学院の三つの源流	8
関東学院の創立	9
廃墟の中からの出発	10
関東学院の女子教育	11
焼跡の誕生より	12
関東学院六浦小学校	13
関東学院小学校の歩み	14
開園の経緯と歩み	15
幼稚園からこども園へ	16
学校法人関東学院および関東学院各校の役職者	17
坂田記念館展示『坂田祐の足跡』	20
坂田記念館所蔵資料	25
学院史資料展2017	
「建学の精神と校訓『人になれ 奉仕せよ』の教育」	30
第一次世界大戦後（第二次世界大戦前）の「1919年」	37
編集後記	39
坂田記念館 案内	40



坂田祐先生の胸像（同窓生寄贈）  
水船六洲（日展出品作品）  
1953（昭和28）年、ブロンズ製



関東学院中学部校旗（1928年12月3日制定）

中学部校旗は「橄欖」の葉のついた枝を  
組み合わせ、その中に「中学」といた  
もので、橄欖は平和を意味する。



坂田記念館（1990年6月5日完成）  
鉄筋コンクリート造二階建、  
総延床面積573.55㎡、高さ11.1m

## はじめに

関東学院 学院長 小河 陽

2017年度の『学院史資料室ニュース・レター』発行の時期が巡って参りました。関東学院中学校高等学校が2年後の2019年に創立100周年を迎えるにあたって現在様々な記念行事が企画される中、学院史資料室としては、本年度は関東学院中学校高等学校の歴史にまつわる資料紹介のテーマを中心とする特集を組みました。

私たち人間は歴史の節目節目に自然と過去を振り返ります。それは単に過去を忘れないとか、過ぎ去った時代を懐かしんで、あれこれの出来事を追想するというだけでは決してありません。それが1つの時代の流れに区切りを付けると同時に、新しい時代に向っての方向づけの必要を感じ、そのための手掛かりや示唆を、過去を振り返る行為を通して得ようとするからでしょう。

かつて、20世紀の著名な歴史家であるA. トインビーは『歴史の教訓』という書を著して、歴史を回顧する意義を説きました。「歴史から学ぶ教訓」とは、「2度あることは3度ある」という諺のように、ただ単に、歴史は繰り返すものだから、同じ過ちを繰り返さないようにという消極的な警告を意味するだけではありません。もちろん、特定秘密保護法、集団的自衛権、そして共謀罪へと続く最近の政治状況において、先の大戦がもたらした破滅的惨禍を体験した世代が重い口を開いて戦争の愚かさを語り出す昨今、そのことだけでも十分に意味あることでしょう。

しかし、「歴史は繰り返す」という名言の由来もと言われるツキジダスの言葉に注目すると、それは単に「歴史は繰り返す」という陳述以上にもっと積極的な意味が込められています。彼が『戦史』を執筆したのは、未来の出来事を予言した制御するために、過去に起こったことについての精確な知識を持ちたいと思う人たちに役立つためであった、と言います。それは、人間の性質というものは実質的に同じであるから、未来の出来事は過去の出来事に似ることであろうからだ、と。つまり、歴史を作り出しているのは一定不変の〈人間の性質〉であって、それが歴史的出来事の原因となる根本要因なのだから、人間が過去においてどのように行動し振る舞ったかを知ることは、私たちが私たち自身の未来を作り出していくための現在の適確な判断と決断のために有益なことなのだ、ということです。すると、歴史とは私たちの意志が作り出すものであり、そして過去を振り返ることは、私たちが待望する未来のために現在どのような決断と行為を選び取る必要があるかを理解させてくれます。人は常に現在を過去という背景において眺めなければ、現在の真実の相を理解できないし、また、現在の真相を理解することによってのみ、人は未来を洞察し、未来に影響を及ぼすことができるのです。

歴史について考えるとき、「歴史とは過去と現在の対話だ」というE. H. カーの言葉も必ずと言って良いほど引き合いに出されます。「対話」とは相互の理解のためになされる行為だとすれば、この言葉は、過去の出来事の意味が決して一度限りに不変的に決定されたも

のではなくて、現在と相関しており、現在のコンテキストにおいて初めて見えてくるような局面を持っている、そういう意味で、絶えず見直され新たに発見されていくものだという洞察を表現するものだと思います。その意味で、「歴史との対話」が可能であるし、また繰り返し対話する必要があります。そして、過去という時点からすれば未来である現在時から過去を振り返ることができるからこそ可能となる過去の意味づけがあるということなら、現在の私たちの意志と行為がどのような未来を作り出していくかが、現在の意味、ひいては過去の意味を作り出していくのだ、と言えるでしょう。現在を生きる私たちは私たちに関わる過去に対しても未来に対しても責任を持った存在であることを意識するよう促されているのです。

さて、中学関東学院設立から1世紀近くにおよぶ学院の歩みを振り返るとき、私の心に浮かぶのは、「からし種の譬え」として聖書に記されるイエスの教えです(マルコ4:30-32とその並行箇所)。地に播かれた小さな種が、成長すると、鳥が葉陰に巣を作るほどの枝を張るまでに大きくなる。しかし、そのためには種を蒔いた人だけではなく、それに先立って土を耕した人、そして水を注ぐ人も必要です。ここで自然と、「私は植え、アポロは水を注いだ。しかし成長させてくださったのは神です」と語るパウロの言葉が連想されます(第1コリント3:6)。確かに、種の成長と結実には様々な力の働きがひとつとなってもたらされるものです。「農夫」が成長のための環境を整え、「種」は芽を出し成長するのですが、種が勝手に育つのではなく、「土がひとりだに〔種に〕実を結ばせる」とイエスは別の譬えで語っています(マルコ4:26-29)。私たちが学院の歴史を振り返るとき、学院の礎を築いた人々、そしてその礎の上に建物を建て加えていった人々の業績をその努力や苦労と共に追憶し、意味づけを新たにしますが、私はこれら学院の発展のために力を合わせて働いた人々を、聖書の語ることに照らして思い浮かべるとき、私たちが学院のこの成長ぶりを未来に向けて語り伝えていく折には、これらの人々の働きが実を結んでいった背後に働いた力、「成長させてくれた神」の働きを思い起すことも忘れてはならないと思います。様々な力の協働が、そして、それらを根底で支える見えない神の力が、「発展してゆく学院」を支えてきたし、これからも支えてくれるだろう、と。



2017年竣工の大学3号館



## 関東学院とYMCA活動

関東学院中高 元宗教主任 海老坪 眞

### 大学YMCA 一手に残った一冊のノート

関東学院のYMCA活動が戦後どのように始められたか、私の手元に残る一冊のノートからお話したい。

敗戦後の1946年、当時は経済専門学校の学生であった私は中居京先生から「学内でYMCAをやらないか？」と声をかけていただいた。このノートにはYMCA活動設立時と初期の活動が記録されている。

1946年6月6日に行われたYMCA相談会（活動を始めるための最初の話し合い）には7名が参加した。

その場で6月10日の朝礼時に最初の募集をおこなうこと、定期集会として毎週木曜日の昼休みに弁当持参で集合して昼食会（ミーティング）を行うこと、定期集会として宗教講演会を行うことなどが決まった。

戦時中に行われた学校統合で本学院は青山学院、明治学院との間で学部統合が行われ、1944年に関東学院は航空工業専門学校を設立した。

戦後の関東学院の再出発の時には戦時中に設立された関東学院航空工業専門学校が戦後の1945年に関東学院工業専門学校と改組して残り、翌1946年に関東学院経済専門学校が開校して、戦前は海軍の養成所があった六浦の地が払い下げられたことで始まった。

私は当時、1946年に開設された経済専門学校の学生（一期生）であった。

YMCA結成時に集まった学生は工専3年が5名、同2年が2名、同1年が8名、経専1年が6名という構成で部長に中居京教授、講師には工専の山柁雅信教授、同じく経専の柴三九郎教授を迎えてのスタートであった。

一年生であった私がKGCYMCA設立時（KGC:関東学院工・経専門学校）に委員長に推薦されたのは、上級生たちが中学関東学院の後輩たちだったことからである。出征していた私は数年遅れての進学であった。

第1回の昼食会は6月13日（木）に行われ、中居部長以下12名の出席があり、部長談話を拝聴している。第2回が6月20日、第3回は8月7日と開催日が記されている。

第1回の宗教講演会は6月15日（土）の午前9時より10時半まで霞ヶ丘教会で開催された。講演者は時田信夫で題目は「基督教とは何ぞや」で13名の参加者があった。

第2回の宗教講演会は6月22日（土）で午前10時より11時半まで、会場は第1回と同じ霞ヶ丘教会で開催されている。講演題目は「青年とYMCA」、中居京先生の講演であった。

夏季聖書集会（当時は「修養会」とはいわなかった）は山柁先生が手配してくれた葉山町堀の内11番地にあった柏木荘で7月11日（木）から13日（土）で行わ

れ、第1日目に30名、2日目は32名、3日目は22名が参加している。当時は宿泊せず、10時より16時までの開催で、日帰りでの集会であった。

中居京先生より「ミッションスクールの伝統」について講話をいただいたが、当時の奉仕活動の中には「讚美歌めぐり」という仕事があった。戦後の物の無い時期で讚美歌が手に入らず、模造紙に書いた讚美歌の歌詞を貼りだし、一番が歌い終わると頃合いを見計らってページをめくる作業である。

3日目は三春台の卒業生であり伊藤卓二先生（三春台の校歌の作者）が参加して「青海は・・・」で始まる校歌が初めて披露され、その解釈を聞かせていただいた。

坂田祐先生が『内村鑑三との思い出』として柏木荘で共に学んだ思い出を語っているが、その柏木荘を解体して葉山に再建したという歴史がある。

余談ではあるが、柏木荘から1日目にはみつ豆が、2日目にはトコロテンが差し入れられた。3日目は我々が夕食を作り、食していただいた。

第1回青年礼拝がもたれたのも1946年9月29日（日）である。主催は横浜基督者学生聯盟で4専門学校Y（高工・Y専・横専・KG）の4つの専門学校のYMCAによる合同開催であった。場所は紅葉坂教会で80名が参加している。

その年の暮、12月21日（土）に南海大地震（M8）が発生した。YMCAでは被災者支援募金活動を23日から25日まで行っている。私は警察署を訪ねて伊勢佐木町で募金活動を行う手続きなどを行っている。映画館の休憩時間に募金箱を持って席を回って募金を集めるとい、なかなか拒否しにくい手法での募金活動であったが、当時のお金で3100円余りを集めることができた。朝日新聞社、読売新聞社に1000円ずつ、残りの1100円余りを基督教新聞社に寄付金を託したと記憶している。



1951年 関東学院大学YMCA修養会

その他の記録として伝統的な東山荘夏季学校56回、57回の記録が残っている。

第56回夏季学校のテーマは「現代世界における教会の実存」であったが、私はそこに参加して「伝道者に

なりなさい」という使命を感じ、神学校への針路を選択した。

東山荘の隣には秩父宮家の別荘があり、秩父宮殿下と妃殿下が我々の集会に来てくださり、その際に殿下よりYMCA活動についての激励のお言葉を戴いた。その際に我々の学生仲間の一人が「そうおっしゃられる殿下はキリスト教信者になられないのですか」と質問して、殿下を困惑させた出来事を記憶している。

そのような失礼な出来事をお詫びするために後刻、夏季学校校長ほか数名が宮家の別荘に伺って丁寧に詫言している。

### 関東学院高等学校のHi-Y活動について

大東亜戦争敗戦の年1945(昭和20)年、南区三春台にある関東学院中学部は磯子区(今は金沢区)六浦にあった航空技術廠工具養成所の施設が使用許可され、同年12月に移転した【因みに大蔵省保管の国有地、約2万坪と建物約9千坪を米国ミッションの援助で学院の物となったのは1951(昭和26)年4月9日であった】。

この六浦で自主活動グループとして高等学校生徒有志による基督教青年会が誕生するのであるが、その前に関東学院ではいつ頃から基督教青年会があったのか。それは古い話であるが1919(大正8)年1月27日に誕生した私立中学関東学院で同年9月に基督教青年会が誕生している。と言うことは基督教青年会が関東学院と共に始まったといえる。

その会の活動は、毎週定期的に放課後一時間をクラス単位で聖書の学びをしていたようだった。1923(大正12)年度になると1年から5年まで揃った全校生徒570名を10名から15名で小集団を組織した。そこでの活動は相変わらず放課後の集会中心であり、全教員34名の内の15名が聖書を教えることにした。それを総括したのは聖書科主任の安村三郎先生であった。

大正12年4月の時点での15名の教員の中の佐々木正雄先生は僅か5ヶ月後の関東大震災の時に校舎破壊の際に亡くなられた。尚15名の先生の中で社会的によく知られた先生として長崎、高谷、藤本、安村の諸先生がいる。

長崎次郎先生は中学関東学院誕生1年前から長崎次郎書店の店主、後には新教出版社初代社長になった人。

高谷道男先生はヘボン研究者にして横浜文化賞受賞者。

藤本伝吉先生は讃美歌213番「みどりの牧場に我らを臥さしめ……神の人よ 神の人よ……」を作詞した人で「神の人よ……」はベンネット宣教師のことだと言われている。

安村三郎先生は敗戦後何度も来日された巡回宣教師スタンレー・ジョンズの専任(?)通訳者で有名であった。

話を戻して戦前の青年会が戦後六浦に移ってから関東学院High School YMCAとなった。これを通称ハイYと呼んでいた。ハイYは学院内にあっての自主運営の会であり、戦後の精神的枯渇状態の中でも精神的拠り所として在校生にも認められていた。

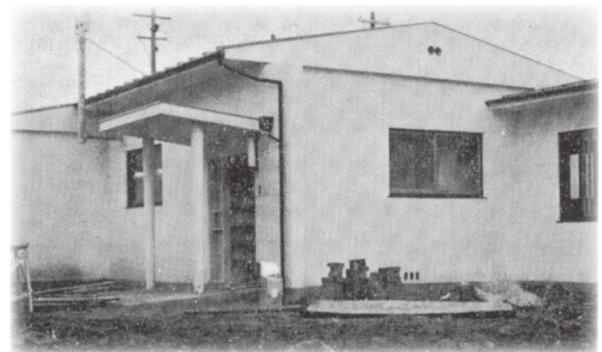
1955(昭和30)年には毎日新聞紙上にハイY活動が評価された記事が載った。それは「ハイY精神の実践として、山手の水上学校のグランド整備や下水道の修理等々のこと」で、◀創立35年の長き伝統と共に社会的役割を果たしてきた点から言えば関東学院高校の基督教青年会(ハイY)の存在は他校の追従を許さぬものがあるようだ」とあった。

ハイYは放課後に週に1回の聖書研究を始め、月1度の合同礼拝、夏には修養会、冬にはクリスマス等々を実施していた。そのような中で一つの活動として機関誌を発行し会員相互の学びのためと会員以外の生徒にハイYを知って貰うために発行していた。その名を「聖流」と決めた。

今一つはハイYの部屋の問題に関して語る。ハイY活動の拠点として1950(昭和25)年代になると四つの塔の一室を使用したこともあった。その部屋には備え付けのテーブルと椅子があって聖書研究会や祈祷会、機関誌「聖流」の印刷等々に便利であった。1954(昭和29)年に木造二階建て高校校舎が完成した時、その二階の東端の細長い部屋に移った。塔の部屋よりは若干広く、使いやすかった。部屋にはスチーム暖房も設置された贅沢なものだった。その贅沢な部屋なのに更に贅沢な難問が一つあった。それは校舎の中の一部であるために下校時間になると週番生徒が回ってきて下校しろと言われた。それでも下校しないと今度は週番教師が怒鳴りに来ること再三再四であった。

そのような使用時間の制限のために、「自分達の活動のための独自の部屋が欲しい」と言う願いが1953(昭和28)年頃から具体的に動き出した。そこで「関東学院ハイY会館建設趣意書」を作成し学内外、ハイY OBや他校ハイY等の方々に訴えて理解と協力を依頼した。現役会員はミルクショップを昼休みに自主運営して、聖書や讃美歌のビニール製ブックカバーを販売した。現役会員やハイY OBの面々は月々30円を定額献金として捧げた様々な方法をもって基金集めをした。

趣意書には、◀……私達のハイY運動に従事して来た幾多の卒業生の常に心に描いていた夢、又私達現在この運動に参加している会員一人一人が痛切に感じているものは、私達自身の会員室の必要なこととなります。……と述べて◀会館の建築様式は「木造建築またはブロック建築」、坪数は「約30坪(約100㎡)」、予



ハイY会館「おりぶの家」

算は「150万円（坪当たり4万円）」。募金運動は「昭和27年より昭和31年末までの5ヶ年」>とあった。

5ヶ年の募金運動で集まった金額は目標に達しなかった。それでもハイY会員の熱意を汲まれた学校側の援助を得て、1957（昭和32）年6月には床面積21坪（63㎡）の会館の献堂式の日を迎えた。私はこの年の前年に赴任したばかりで、募金運動の最終年であった。献堂式では「献堂の祈り」を私がした記憶がある。なお幸いなことには会館に付随した約200㎡の芝生の庭付き会館であって、気分転換にはその庭で集会をしたことも屢々であった。会館の名称を当時の清水武校長は「おりぶの家」と命名した。会館は学校当局が校舎増設やテニスコートや駐車場のために姿を消し、玄関前の石板表札は坂田記念館に保存されている。

1957（昭和32）年夏から学外での活動として瀬戸内海に浮かぶ福音丸伝道を6年間も協力奉仕した。この伝道奉仕活動は他校ハイYに無いユニークな活動であったと思う。小さい船なので参加を希望する生徒の中から定員4人を毎年選び私が責任者となって福音丸船長小林さんのかじ取りによって7日間島々で子供会などをした。船内に狭いけれどもキッチンがあり、三食を自炊したものだ。風呂の設備はなかったので集会する島の銭湯（風呂屋）に出かけた。6回の伝道奉仕に参加した生徒一同が最も強烈な印象を持った島は安居島という極めて小さい島（島で暮らす人々の家は50軒位）、自家発電ならぬ自島発電で夜は10時に全島発電停止だったので集会後の整理が大変だった。どこの島の子供たちも純真だったが、安居島の場合は大人まで純真な人々に見えた。翌日島を離れる朝には島の子供たちは全員と思うほどでの大勢の見送りを受けた。

6年間に参加した生徒は24名（二度の参加あり実数

は17名）。その17名の中から牧師になった者が4名も出たのは神様の導きだったと信じ感謝している。

時代は移り変わって社会が左傾化運動の盛んな時期にハイYの有志は国会議事堂前でのデモに参加した。

学内では生徒会という組織があって文科系、体育系のクラブ活動を総括していた。ハイYもその生徒会に加入することが学内での在り方ではないかと決め加盟を申し込んだ。まずは同好会として、次に正式メンバーとなれたが、ハイYは衰退の一步を辿り、再び同好会へと、そして生徒会から姿を消したのは1972（昭和47）年の時であった。

今になって猛烈な反省は宗教主任の肩書を持つ私が、生徒会からははじき出されたハイY、当時会員は一握りに過ぎない生徒に生徒会に入る以前の自主活動のハイYを再び起こさなかったのか。一握りの生徒でも私が声をかけて「ハイYをもう一度やろうよ!」としなかったのが悔やまれる。

いつ頃からかハイY出身の面々がハイYのOB・OG会を立ち上げ、今も継続して二年に一度の集いを行っている。その人たちは何とかして学内に今一度ハイYを復活できないものかと頭を抱えているし、校長にも相談したこともある。何か名案がないだろうか。と考えるだけの私である。



2017年 Hi-Y OB会（10月27日開催）



1943年 関東学院中学第20回卒業記念写真

↓ 白矢印 海老坪先生  
（右上は拡大写真）

海老坪眞先生は関東学院中学部を1943年に卒業されました。

第二次世界大戦では陸軍飛行兵として従軍され、復員後に関東学院経済専門学校に入学されています。その後、同志社大学神学部、日本基督教神学専門学校を経て、京都バプテスト教会に伝道師として就任、1956年に関東学院中学校高等学校の教師として学院に迎えられました。その際開拓伝道も開始され、磯子の丘教会を設立されています。先生は関東学院にて長く宗教主任を務められ、退職後には磯子の丘教会で牧師に専念され、1995年に引退されました。

学院史資料室

# ◆ 関東学院各校の変遷 (1884 - 2017 年)



※ < > 内は 39 ページの資料番号

<p>1950</p>  <p>横浜バプテスト神学校の教師と学生</p>  <p>横浜バプテスト神学校教員</p> <p>アカデミーJ)は築地外国人居留地、新栄6丁目42と43に設立。そのW・ダンカンの功績を記念して、英語による校名をダンカン・アカデミーに&lt;2&gt;</p> <p>設立者はC・B・テンネー、院長は坂田祐。4月9日、第1回入学式に関東学院の校訓として受け継がれている。(源流記念碑文より)&lt;2&gt;</p> <p>1927年4月から財団法人関東学院が組織され、東京学院が合併してその組織の中に入り、高等学部(社会事業科、商科)、神学部となる。6月には中学関東学院も入り中学部と改称された。/1947年教育基本法、学校教育法が公布され、新制中学校・高等学校として歩み続けることとなる。&lt;1,2&gt;</p>	<p>1975</p>  <p>東京中学校校舎</p>  <p>東京学院と神学校の教員</p>	<p>2000</p>  <p>関東大震災(被災調査)</p>  <p>東京学院校舎</p>  <p>東京学院校庭に整列</p>
<p>1947</p> <p>1956 廃止</p> <p>1952 第二英語学校廃止</p> <p>学院英語学校(夜間授業)が設立され、坂田祐が校長。大下繁喜が主事であった。&lt;1&gt;</p>	 <p>中学関東学院 第1回卒業記念</p>	 <p>戦争前の三春台キャンパス</p>
<p>学校名変更(工業学校)</p> <p>1948 合併(商工高等学校)</p> <p>1946 学校名変更(商業学校)</p> <p>1973</p> <p>追浜工業学校という夜間の教育施設があったが終戦により解散になったのでこの学校を吸収して関東学院追浜工業学校とした(1946年)。1948年学制改革により関東学院商業学校と関東学院追浜工業学校を合併して、夜間定時制の関東学院商工高等学校が発祥した。しかし、経済成長とともに高校進学者は増加する一方、夜間の定時制高校への進学者は減少し続ける状況から、1973年3月の卒業生をもって休校のやむなきに至った。&lt;3,16&gt;</p>		
<p>1951 航空工業専門学校から工業専門学校に転換。1951年3月新制大学の発足によって廃校。&lt;1&gt;</p> <p>1951 六浦校地に設立。校長に古賀武夫が就任。1951年3月新制大学の発足によって廃校。&lt;1&gt;</p> <p>1951 三春台校地に開校。校長は相川高秋が就任。(英語科、家政科)&lt;1,2&gt;</p>	 <p>航空専門学校正門(後の大学1号館)</p>	 <p>戦争直後の六浦キャンパス</p>
<p>1952 廃止</p> <p>改名</p>	 <p>女子高等学校第1回卒業式</p>	
<p>1949年に大学が設立されたとき、中居京牧師は同研究所を設けて自ら所長となった。この年の夏、大学で開かれた日本バプテスト新生会の大会において、基督教研究所をバプテストの伝道者養成機関としてほしいとの要請があり、これに応じて1951年より学生募集を行った。学生は(大学卒を除いて)経済学部籍を置き、5年間で経済学士の課程を習得するとともに伝道者として必要な学科を修めなければならなかった。のち、神学部へと発展する。&lt;2&gt;</p> <p>1950</p> <p>1957</p> <p>関東学院短期大学</p> <p>1957</p> <p>1967</p> <p>1957年関東学院短期大学として独立(学長白山源三郎)、三春台から六浦へ移転。1967年、短期大学第二部は廃止され、女子短期大学と改称された。&lt;2&gt;</p>		 <p>礼拝堂と神学館</p>  <p>女子短大校舎</p>
<p>関東学院女子短期大学 1967</p> <p>備された。&lt;2,7&gt;</p> <p>2002 改組</p> <p>2004 閉校</p>	<p>1965</p> <p>元は実業家村井吉兵衛氏の別邸。終戦後建物を譲渡、学校法人紫苑学園、啓佑学園を経て、関東学院葉山小学校となる。&lt;3&gt;</p>	 <p>葉山小学校</p>
<p>1976年4月野庭団地の中に開園。初年度は153名の幼児が入園。&lt;3&gt;</p> <p>のびのびのば園</p> <p>開設時は野庭幼稚園</p> <p>1975</p>	<p>1975</p>	

## 関東学院の三つの源流

### (一) 第一の源流

#### 横浜バプテスト神学校

関東学院には三つの源流があり、まず第一の流れと第二の流れが合同して一つの流れとなり、さらに第三の流れがこれに加わって、一つの本流となって関東学院が形成されました。その第一の流れは、1884（明治17）年10月6日に、横浜山手64番地に設立された横浜バプテスト神学校です。同年の春に、N・ブラウン宅でアメリカ・バプテスト・ミッションの会議が開かれ、神学校創立の議がA・A・ベンネットから提案され、満場一致で可決されました。こうして横浜バプテスト神学校が生まれたのです。校長はベンネット、教授はT・P・ポート、C・H・D・フィッシャー、学生は5名でした。



### (二) 第二の源流

#### 東京中学院

関東学院の第二の源流は東京中学院で、これはのち改称されて東京学院となりました。アメリカ・バプテスト教会では、日本人の伝道は日本人の手で行うという方針により横浜バプテスト神学校を設立しましたが、伝道者になるべき人たちの基礎教育の必要を感じて、1895（明治28）年9月10日、東京築地居留地42・43番地に東京中学院が開校されました。



#### 東京学院

東京中学院は1899年9月、東京牛込左内町29番の土地を購入し、ここにまず寄宿舎を新築しました。こ

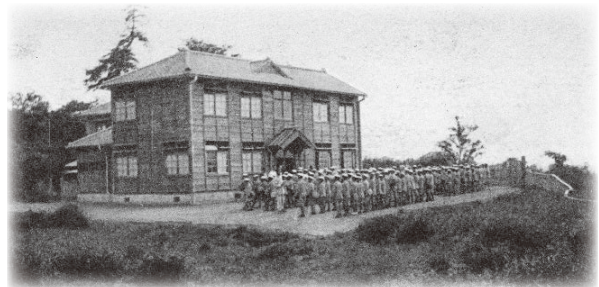
れを仮校舎として、ここに移転し、翌1900年、校舎も完成し、校名も東京学院（Duncan Academy）と改称しました。1905年には、専門学校令による高等科を設置、中等科は文部大臣の認定を受け、卒業生は中学校卒業と同等の資格特典が与えられました。（1915年、中等科、高等科をそれぞれ中学部、高等部と改称）南北バプテストの協力で始められた日本バプテスト神学校は、1919年になって南部バプテスト教会が撤退し、北部バプテスト教会のみの経営となり、それは東京学院に合併し、東京学院神学部となり、東京学院は高等学部、神学部をもつ学院となりました。



### (三) 第三の源流

#### 中学関東学院

第三の源流は中学関東学院です。1919（大正8）年1月27日、設立者C・B・テンネー、院長は坂田祐で設立されました。場所は横浜市三春台の高台でした。東京学院中学部は、1917年3月限りで閉校することにし、横浜で教育を継続することにしました。同年11月、横浜山手75番のフィッシャー宅で中学関東学院の第一回理事会が開かれました。1919年4月9日に入学式を挙げて、中学関東学院の教育が始まりました。（1922年、上級学校入学資格、徴兵猶予の特典を取得）しかし、完成間もない立派な校舎は1923年9月1日に起った関東大震災によって大被害を受けました。やがてこの打撃も乗り越えて、順調に発展し、総合学園への充分な基礎固めをして行きました。1927（昭和2）年4月、東京学院の高等学部と神学部が横浜に移転して関東学院と合同し、財団法人関東学院が設立されました。学院長はC・B・テンネー、副学院長は千葉勇五郎、理事長は渡部元、高等学部長と中学部長は坂田祐、神学部長はテンネーの兼任でした。





## 関東学院の創立

### 設立披露の式典

大正6年(1917)東京学院中学部を閉鎖した事は前述したが、間もなく横浜市南太田町字霞耕地に11,459坪の土地(俗称、兵隊山)を校地として入手することが出来、大正7年6月には代金全部の支払を完了した(原所有者は神奈川県)。大正6年11月23日横浜山手75番フィッシャー宅で聞かれた第一回理事会ではこの新しいバプテストの教育機関について次の通り決議した。①中学程度の基督教主義の学校を設立する。②名称を私立中学関東学院とする。③坂田祐を校長とする。④生徒定員を600名とする。⑤設立者をテンネーとする。そして最初の理事はテンネー、フィッシャー、渡部元、高橋楯雄、植山直樹、ブリッグスの6名(ブリッグスは間もなく病気のため帰米したのでグレセットが代った)であった。かくて、大正8年(1919)1月27日横浜開港記念会館において関東学院設立披露会を開き、県市の教育関係者、内外の名士200余名が来会した。有吉忠一神奈川県知事の特別なあいさつ、米国大使の祝辞その他があつて関東学院の出發を祝う盛大な集いであつた。以来この1月27日は学院の創立記念日として祝われている。



関東学院校舎の完成予想図(米国バプテストの資料から)

### 設立当時の学院

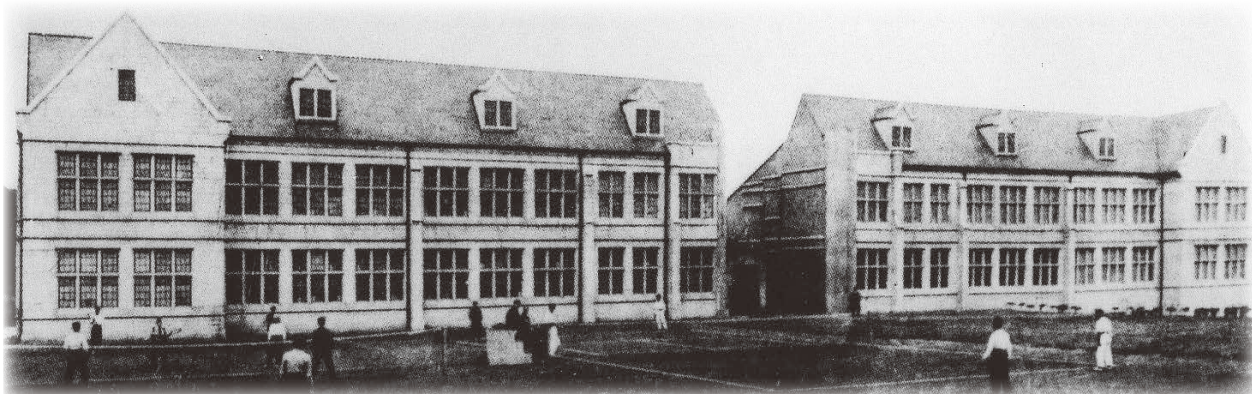
同年2月21日寄宿舎の定礎式を行い、木造二階建一棟を3月末竣工し、これを当初校舎として使用することとした。山手75番山手英学院を仮事務所として生徒募集を行い、第一学年志願者312名中から146名を選

抜して4月から授業を開始した。4月9日、入学式に於て坂田院長は「人になれ」「奉仕せよ」を力説し、この二つは関東学院のモットーとなった。開校当時の職員は院長坂田祐、教頭高田運吉、教員佐々木正雄、八代竹男、内海悟、田口勝四郎、永沢久助、グレセット、フィッシャー、山下助四郎、有田四郎、伊達愛、書記猪狩久、校医佐久間文治の諸氏であつた。バプテストの機関紙基督教報は「教育に於ては失敗の歴史を綴りたる我がバプテストも今や漸く新希望の曙光に接したりというべきなり。因に言う坂田院長及び田口幹事は四谷教会員、高田教頭は熊本バプテスト、内海氏は仙台、佐々木氏は佐沼、八代氏及び伊達氏は芝教会の会員にして理科の山下氏、図画の有田氏も基督信者、また書記の猪狩氏は岩谷堂の信者なり。バプテスト万才!」と書き、原松太氏も「日本に於て邦人を首脳として経営せらるる最初の教育事業たる本校が意義ある実績を挙げ得んことを祈る」と同紙上に述べて関東学院の出發を祝つた。勿論、米国バプテスト・ミッションが学院にかける期待は極めて大きく、いくつかの特別なパンフレットも作成されて広く米国内に70万ドルの拠金を呼びかけたのである。又、米国に於ては、関東学院を Mabie Memorial Boys' School in Yokohama と呼び、1890年から1908年まで米国バプテスト外国伝道会社主事であつた偉大な東洋伝道者H・C・メイビー博士の名を冠して関東学院の發展を願つたのである。やがて大正9年(1920)3月末には米国からの基金を以て、瀟洒な英国風の鉄筋コンクリート二階建校舎の一棟が三春台上に完成し市民の眼をうばつたのである。

(『関東学院-歴史と現況』昭和40年発行より転載)



中学関東学院の理事たち



1920年第1期工事を終わった関東学院の瀟洒な校舎、中央に塔が、後方に寄宿舎その他が予定されていた

## 廃墟の中からの出発

学院は1945年8月15日の終戦とともに新たな局面を迎えた。新時代に即応するため前年4月に設立した航空工業専門学校を9月に工業専門学校に改組し、機械科を設置した。しかし、三春台の校地は5月29日の横浜大空襲によって4分の3を失っており、白山源三郎校長は出征中であった。また、44年に廃止を明示された高等商業部を経済専門学校として復活させる案も、用地不足等の理由で実施不可能だと思われていた。これらの問題を解決するため学院当局が注目したのが、横浜市磯子区（現在の金沢区）六浦町の旧海軍航空技術廠工具養成所の用地であった。同用地・施設の払い下げについては神奈川県立第一中学校（現神奈川県立希望ヶ丘高校）や横浜専門学校（現神奈川県立）など、ほかの団体も着目していたので、迅速な対応が求められていた。こうして、相川高秋校長代理と古賀武夫財務部長の尽力によりその見通しが立ったため、経済専門学校設立の申請書を文部省へ提出することになった。



1952年 航空写真（六浦校地北向き）

そしてついに1945年12月、相川、古賀や、GHQで通訳として交渉に当たった時田信夫らの尽力により、大蔵省東京財務局長から、旧海軍航空技術廠工具養成所の校舎、機械、器具一切を使用できる旨の一時使用認可書が関東学院理事長、坂田祐に通達された。経済専門学校の設立申請に関しては、1946年3月に文部大臣から専門学校令により設置認可の証書を得、同時に古賀武夫を関東学院経済専門学校長と認定する旨も受けた。こうして同年4月1日、経済専門学校が設立した。また、従来の工業専門学校では、機械科のほかに建築科も新設を認められた。

1947年4月、工業専門学校に電気科が増設され、5月に古賀校長が辞任し、出征から帰還した白山源三郎が工業専門学校長と経済専門学校長事務取扱を兼任した。48年4月、経済専門学校に二部も併設され、この授業は勤労青年にとって通学の便がよい三春台において行われた。これらは旧制専門学校であり、1951年3月に新制大学設立に伴い廃校となった。

1947年3月公布の学校教育法により、わが国の教育制度は六・三・三・四制に改革され、旧制の専門学校はなくなることとなった。これにより、本学院では専門学校を廃校とするか、大学に昇格させるべきかの二者択一を迫られることとなったのである。専門学校を大学として継続させるには、校地など幾多の困難があり、学院にさらに大学を設置するか、新制高等学校にとどめるべきかについて、学院当局者の間で議論があった。大学に昇格すればアカデミックな傾向が中心となるため、建学の精神であるキリスト教との問題が起る可能性がある。しかも、大学を運営するには莫大な費用を要する。しかし経済専門学校は高等商業部時代を加算すると、すでに20余年の歴史を有しており、廃校を惜しむ声も高かった。工業専門学校も大学として継続すれば、旧海軍航空技術廠工具養成所の工場を活用して工学教育を行うことができる。白山源三郎校長は大学設置に積極的であった。



大学設立時の一号館と門標

1949年2月19日、理事会は「(1) 関東学院大学の学長、学部長、科長など幹部はキリスト教信者たること、(2) 関東学院大学々長は認可申請の通り白山源三郎とし、経済学部長は白山学長が兼任すること、工学部長事務取扱いを秋葉隆吉（六浦製作所工場長）とすること」を決定した。同年2月21日、文部大臣より関東学院大学設置について大学設置委員会の答申に基づき正式に認可の通知があった。なお、電気工学科の開設については、スタッフの点で条件を満たせぬため、次年度に改めて申請することとなった。こうして、1949年4月1日、関東学院大学は六浦校地において設立するに至ったのである。開校時の学生数は経済学部122名、工学部48名（機械工学科15名、建築学科33名）、計170名であった。

（本文は『関東学院大学のあゆみ』2017年大学発行より転載）



平潟湾から臨む（旧1号館他）

## 関東学院の女子教育

女子短期大学 元学長 小玉 敏子

関東学院が女子教育を始めたのは第二次世界大戦後の1946（昭和21）年でした。女子に対して高等教育機関が開放され、男女間の教育の機会均等が法的にも社会的にも実現されようとしていた時代です。学制改革を前にして、1946年、女子専門学校が全国で22校、翌年26校創設されました。

坂田祐院長は1932（昭和7）年以来、同じバプテスト派の捜真女学校の校長を兼務していました。捜真女学校には戦前から専門科がありましたが、戦争中にそれを廃止していました。1923（大正12）年の関東大震災で関東学院の校舎は崩壊しましたが、捜真は大きな被害を受けなかったため、二つの学校は捜真で二部授業を行いました。

1945（昭和20）年5月29日の横浜大空襲で全校舎を失った捜真女学校が今度は関東学院の焼け残った校舎で授業をしていました。再建が困難とみられた捜真女学校に対し、坂田院長は合併によって捜真女学校を発展させる案を提示しましたが、捜真女学校の同窓生たちが「捜真女学校」という名称が消えてしまうことに強く反対したため、この提案は実現しませんでした。

坂田院長は捜真女学校の校長および理事長を辞任し、それまで男子校であった関東学院は、独自に女子専門学校を設立することにしました。空襲によって校舎の4分の3を失い、図書館にあった3万冊の本を焼失した関東学院に、経済専門学校と工業専門学校ほかに、女子専門学校を開校しようとするのですから、関係者の苦労は並大抵ではありませんでした。半年にわたる関係者の粘り強い努力とアメリカのミッション・ボードの援助によって1946（昭和21）年3月30日に文部省の認可がおりました。校長は相川高秋、入学定員は英語科100名、家政科50名でした。さっそく、第1回生の募集が行われ、試験の結果、英語科77名、家政科60名が合格しました。英語科の不合格者24名は予科に入学を許可され、1年後、成績不良者を除いて女子専門学校進学が認められることとなります。入学式が行われたのは6月1日でした。

戦争末期には勤労動員のために学生は十分な教育を受けることができませんでした。しかも、女子の場合は終戦まで制度上も社会習慣上も高等教育を受ける機会が制限されていました。戦後の女子教育振興策に刺激され、多くの女性が高等教育を受けようとしていたので、関東学院女子専門学校にも年齢、経験などの面からみても多種多様な学生が入学しました。学生たちは熱心に毎日の授業や礼拝に出席したのみでなく、夏期修養会、クリスマス、母の日、花の日などの宗教行事や奉仕活動、読書会、シェークスピア劇上演、修学旅行、クラス会、遠足、キャンプ、レクリエーション、クラブなどの学校行事や課外活動に積極的に参加しました。

1948（昭和23）年から1949（昭和24）年にかけて旧制の大学、専門学校、高等学校が新制大学に転換しましたが、私立専門学校の中には設置基準の条件が満た



第一回公演 ベニスの商人（昭和23年）

せず、移行できないものがかなりありました。焼け跡に開設されたわが女子専門学校もその一つでした。まだ短期大学制度の誕生が予測できなかったため、検討の結果、5年制の高等学校（本科3年、研究科2年）として女子教育を存続させることになりました。1948（昭和23）年発足した女子高等学校本科は英語科と家政科で、別科に英語実務科と被服速成科がありました。

そうこうするうちに、暫定措置としての短期大学制度が成立したので、女子専門学校は短期大学に移行することになり、1950（昭和25）年4月、関東学院大学短期大学部英文科（入学定員80）、家政科（入学定員30）が発足しました。英文科第二部（入学定員80・男女共学）が認可されたのはその翌年でした。

女子専門学校は三春台校地に創設され、女子高等学校、短期大学部英文科・家政科・英文科第二部も引き続き三春台の校舎を使用していました。しかし、1949（昭和24）年に六浦から三春台に戻ってきた中学校・高等学校の生徒数の増加に伴い、施設が不足してきました。また、短期大学独自の図書館や体育館を建築することも困難であったなどの事情もあり、大学のある六浦校地に移転することが検討され、家政科は1953（昭和28）年に、英文科（第一・二部とも）はその翌年に六浦に移転しました。

授業は大学とは別の建物で行われていましたが、毎日10時15分から35分までの礼拝は大学と一緒に現在の大学7号館の場所にあった木造平屋内の礼拝堂で行われました。この建物は旧海軍航空技術廠工具養成所の食堂を改造したもので、西側に化学実験室と家政科の調理室、南側に被服実習室があった時代もあります。入学式・卒業式・卒業礼拝は大学とは別にこの礼拝堂で行われましたが、やがて、神学部礼拝堂、大学4号館・7号館の大教室で行われるようになりました。

1957（昭和32）年には専攻科（英語専攻）の設置が認可され、短期大学部を「短期大学」と名称変更し、相川高秋が初代学長に就任しました。1967（昭和42）年、男女共学の英文科第二部が廃止され、「女子短期大学」と、再度名称変更しました。

翌年、林淳三が女子短期大学初の公選学長に選出されました。林学長は学長就任に際し、「短大の主体性確立」を主張し、教職員とともにその実現に努力し、女子短期大学は目覚ましい発展を遂げました。

ところが、その後の社会情勢の変化を検討した結果、2002年、女子短期大学は改組転換し、大学の人間環境学部となりました。

## 焼跡の誕生より…

六浦中学校・高等学校 元校長 岩楯 幸雄

わが校の歴史は1945（昭和20）年5月29日の横浜大空襲によって、三春台にあった学院がその施設の大半を焼失したことによって始まる。

その後、焼け残った僅かな校舎で授業を行ってきたが、翌1946（昭和21）年1月、この六浦の海軍航空技術廠工具養成所の跡を学院が国より借り受けることができ、中学部と工業専門学校が三春台からこの地に移転をした。この時、中学部が使用した校舎は、旧木造校舎の1、2、3号館であり、1号館を中学部の本館として管理部門が位置したのであり、これは今の大学本館のある所であった。

1947（昭和22）年に新学制による中学校が設立され、六浦の地において生徒募集が行われた。続いて翌1948（昭和23）年から新制高等学校が設立された。同年11月、三春台校舎の修復がなり、中学校、高校が三春台に復帰することになった。この時、新制の中学校として六浦の地で募集した生徒のうちこの近辺より通学していた生徒が半数以上もあり、その父母たちから六浦に中学を残して欲しいとの強い要望があったので、中学一年の3学級（女子1学級、男子2学級）と二年の2学級（男女各1学級）を六浦校地に残すことになり、旧木造の2・3号館を使用して六浦分校と称して村田副校長以下7人の教員がこの教育に当たったのであった。

1950（昭和25）年、関東学院大学が設立されるに当たって中学と高校は現在の場所にあった旧木造校舎に移転した。そして、この六浦分校にも高等学校を置くことになった。その時の学級編成は高校一年2学級、中学校9学級の編成であった。

1952（昭和27）年12月、六浦の高校より翌年3月に最初の卒業生を出すにあたって、卒業生から分校ではなくて自分達の独立した学校の最初の卒業生として卒業したいという強い要望があり、理事会は六浦分校を三春台より独立させることを承認した。

この事が教員会議の席上坂田院長より発表され、この新しい学校の名称をどのようにするか意見を教員に求められた。様々な名称がだされたが最後に坂田院長は関東学院六浦中学校、六浦高等学校に決定されたのである。

そして初代校長に栗沢竹雄先生が任命された。翌1953（昭和28）年3月その設立が認可され、第一回の高校卒業式が挙行され、関東学院六浦高等学校として87名の卒業生が初めてこの六浦の校地より巣立っていったのである。

[中略]

海軍の教育機関としての養成所の古い寮を改造した木造の校舎やその他の施設もPTAや後援会の積極的な援助と協力によって、次々と新たに建替えられ、鉄筋コンクリートの教室、体育館、特別教室、礼拝堂、本館と数多くの諸施設が記念事業計画として完成した。最近は大学の校内整備計画が実施されるにあたり、これとあいまって本校の校庭も整備され昔の古い木造校舎が全くなり、一新された良き教育環境が生まれてきたのである。

いまここに、本校の過去をふり返って見ると、最初の10年間は教育に於いても施設においても総べてが基礎づくりの時代であったといえる。そして次の10年の前半は戦後のいわゆるベビーブームの影響を大きくうけ、生徒数も時代の要求に応じて増員し、この時に現在の学校の規模が決定したのである。そしてその後半はあの大学紛争が起り、学院もその波をかぶって大きく揺れ動いた時代であった。同じ校地内にあった本校もその影響をうけ精神的・物質的に大きな打撃を受けたのであった。

しかしこの動揺期にあつて本校は、先づ確固たる教育基盤を造ることに重点をおき、無計画な拡張を控えて、ひたすら実ある教育に励んできたのである。そして今日、その成果が実り大いに教育的伸展をすべき時期がきたことを思うのである。

本校の教育の理念は高く限りなく未来に向つて進展してゆくものであり、この理念はあくまでも学院の建学の精神に根ざしたものでなくてはなりません。唯設備の優秀さだけでは真の教育はできません。問題は教育の内容そのものにあるといえる。

この変革極まりない社会の中にあつて、徒らに動揺することなく学院の教育基盤となっている聖書の真理に確く立って教える者と学ぶ者とが真の人間的な触れ合いのうちに、学院の標榜する人間教育を更に効果あらしめる事が本校の将来への教育的伸展の基盤であると信じかつここに希望をつないで教育を進めてゆきたいと念願するものである。



創立当初の校舎

特集「学院各校創立のころ」にあたり、本稿では、岩楯幸雄先生（第2代校長）が『三十年の歩み』（関東学院大学発行 1980年）に執筆された「関東学院六浦中学・高等学校—焼跡の誕生より二十二年…—」（原題）を載録する。

岩楯先生は1962年から1982年まで校長を務められたが、関東学院への就任は1945年にさかのぼる。三春台校地の大半を失う横浜大空襲（5月29日）を体験され、六浦校地への移転、授業開始を担われた。当時の六浦校地は荒れ放題で、戸や窓は毎日のように盗まれ、そのままでは到底授業ができる状態ではなかったという。そのような中、坂田祐院長を先頭に、建学の精神に固く立ち、ともに祈り、学院の復興を目指し、力を尽くされた一人が岩楯先生である。

岩楯先生の手稿をあらためて読むことで、本校の誕生に思いを致すと同時に、建学の精神にたつ決意を新たにしたい。

（関東学院六浦中学校・高等学校 教諭 秋吉和史）

## 関東学院六浦小学校

六浦小学校 元校長 柳生 直行

本六浦小学校が学院の教育の一環として設立されたのは昭和24年のことである。創立の前年、学院教会がキリスト教による幼児教育の理想を掲げて幼稚園を開園したが、その翌年の卒業園児の父兄の要望により本小学校が誕生したのである。

当初の校舎は大学2号館\*階下の1室。次いで中学校舎2階で3か月、青雲寮を使用して7か年、現校地に教室棟2棟が与えられたのは同33年、そして本館(1号館)の完成したのは同38年であった。しかし教室棟は18年余を経過して痛みが激しく、遂に同52年4月新教室棟の建設に着工、同53年4月鉄筋コンクリート造四階建の新2号館の完成を見、ようやく待望の教室が完備されたのである。この間、折りにふれて物質的、精神的両面で絶大なる支援を寄せられた全児童の家庭の芳情と、神のご摂理を忘れてはならない。

今日また次の幻を見ている。それは児童の魂の成長のための礼拝堂、健全な身体の育成を願っての体育館と、すばらしい学校造りの努力は限りなく続けられるのである。

校訓《人になれ 奉仕せよ》は一貫して本学院教育の根幹であり、そのまま本小学校の教育理念である。その基盤はキリスト教であり、神をおそれ、キリストによって示された愛を実践することの出来る「真の人」になり国家社会に奉仕し、世界永遠の平和に貢献出来る人物を育てる。個人の人格を尊重し、小学生の頃より自分と同じように他人を愛し大切に出来る人間として生きることの、本当の価値を知らしめる。こうした最も大切な人格の基礎作りこそ、本小学校に与えられた使命なのである。始業前の礼拝に始まり、終業時の祈りに一日の学校生活が終わる。その間にも聖書のことばを学び、幼い魂ながらも、キリスト教の理解を深める。

「ああ、わたしの幼な子たちよ、あなたがたの内にキリストの形ができるまでは、わたしは、またもや、あなたがたのために産みの苦しみをすると使徒パウロがいうように、児童の心の内に「キリストの形」を形成して行くことが願いなのである。

時代の要求する人間像は時代とともに変わる。しかし本小学校教育の目指す人間像は、時代を超える普遍的なものであり、すべての時代にあって神によるこぼれ、人々に愛される生き生きとした人間たり得る人格と知性とを備えたものなのである。

(『三十年の歩み』 関東学院大学発行より転載)

\*『目で見る40年の歩み(1949～1990)』(関東学院六浦小学校)では「1号館」とする。



開設当初に使われた校舎



1956～58年 建造された六浦小学校校舎とハンソン山



1965年ころ 六浦小学校

六浦小学校の設立のころについて、『三十年の歩み』(関東学院大学発行)から六浦小学校元校長の柳生直行先生の文章をご紹介します。

柳生直行先生(1920-1986)は1978年4月から86年9月まで学院長を務められ、その間の78年10月から79年3月まで関東学院小学校と六浦小学校の校長を兼務されました。先生はキリスト教学者であり、同時に英文学者でいらっしゃいました。前者としては柳生直行訳『新約聖書』(1985年)が高い評価を得、後者としては1952年から86年までの34年間、関東学院シェイクスピア英語劇の総監督として学生を指導されました。関東学院大学図書館には柳生先生より寄贈された資料が「柳生文庫」として所蔵されています。

(関東学院六浦小学校 校長 澤 章敏)

# 関東学院小学校の歩み

小学校 元校長 清水 元

## 1. 三春台分教室開設

1949（昭和24）年、戦災によって六浦のキャンパスに移転した関東学院中学校及び、そこで発足した新制高校が三春台校地に復帰しました。それに伴い、三春台校地にも小学校を設立し、キリスト教に基づく小・中・高校の一貫教育を行おうと、1952（昭和27）年4月、現在の地に関東学院小学校三春台分教室が開設されました。

小学校長は坂田祐学院長が兼務。主事として中学校美術科教諭水船六州が任命され、分教室の開設、運営の一切を直接担当することになりました。

当初、学校規模は、1学年1クラスとし、1クラスの定員を36名と定め、施設の関係で、初年度は1・2年生のみを公募し1年生36名、2年生22名で始められました。

分教室開設初めての入学式は4月5日、当時の高等学校小講堂で、1・2年生の全児童58名と、学院長坂田祐、中高校長清水武、同副校長山本太郎、同若崎重富教諭、小学校主事水船六州、友井栄子、鈴木英子、金子悦子の3教諭出席で執り行われました。

分教室の施設は、戦後急造された中学の木造普通教室2棟が当てられ、校庭は一部にまだ戦災で焼失した旧校舎の基礎コンクリート部分を残している1700㎡ばかりのものでした。しかし、彫刻家として広く名を為した水船主事自ら金槌・鋸を持ち、ペンキを塗り与えられた施設の改造に当たったのでした。運動場の周囲には木製の白い柵をめぐらし、次第に小学校としての独特な雰囲気を作っていました。

[中略]

最初の1年間の教育実践は日を経ずして認められるところとなり、翌1953（昭和28）年度の入学募集では、36名定員に対して135名もの応募があったのでした。この結果、72名を合格とし53年度の1年生についてのみ急遽2クラス編成としました。



1952年10月11日 小中高合同運動会



1950年代校舎



1957年 当時の教員（卒業記念アルバムより）

## 2. 小学校として独立

この年1953（昭和28）年3月六浦校地に置かれていた中・高校が独立し、関東学院六浦中学・高等学校となり、小学校も六浦小学校となったので三春台分教室は独立し『関東学院小学校』と称したのです。

その後、毎年木造校舎を改築増築し、全校6学年が揃うまで教室、講堂（礼拝堂）、特別教室の拡充を図っていきました。

[後略]

清水元（第9代関東学院小学校長）

「関東学院小学校の歩み」（『学院史資料室ニュース・レター』No.8（2006年6月）より抜粋して転載



1953年 秋の屋外なかよし会

## 開園の経緯と歩み

六浦こども園 園長 根津 美英子

1948年に関東学院教会幼稚園として開園した本園は1950年に関東学院幼稚園となり、1981年以降は関東学院女子短期大学付属幼稚園、2003年以降は関東学院六浦幼稚園と名称を変更し歩んできた。

1979年に移転完成した旧園舎は6クラス対応であったが、園児数は少なく2クラス分の保育室が空いている状況であった。しかし徐々に増し、2005年には9クラスとなる。その間、園長室、会議室、職員室は次々と保育室に改修され、スペース的に非常に厳しい状況となった。

そこで2006年から毎年、新施設構想案を提出するなど、新園舎に向けた取り組みを保護者と共に行ってきた。奇しくも同年より、国で認定こども園が創設され、本園の将来構想の基となった。

同年、こども園化を想定し、地域の子育て支援の場としてつどいの広場事業にエントリーし、横浜市より受託する。金沢区第1号の公的広場（関東学院親と子のひろばおりーぶ）が誕生する。

新園舎を願って、教職員が一丸となり進めた結果、2011年によりやくこども園化及び園舎移転建設が決定する。長年の夢が叶い、現実のものとなった瞬間は言葉に言い尽くせないほどの喜びであった。そして、ハード面、ソフト面のようなこども園であったらよいのかについて、約2年に渡りワークショップを行う。参加は全教職員、大学教員、大学生、園児、保護者、地域の方々、金沢区行政の方にも及んだ。10年の年月を経て、2013年3月、教職員と保護者の悲願である新園舎が大学グリーンスペースに完成した。

金沢区第1号の認定こども園である。園舎の特長としては、1階にはアトリエスペースと独立した子育て支援スペース（ひろばおりーぶ）が、3階には大学こども連携室が設けられた。また3階ののりのホールにはガラスアーティスト三浦啓子氏制作のステンドグラスが設置された。

同年3月30日に行われた献堂式で根津園長は、「大人の何倍も有能な学び手である子どもの「感じる心」と「発想力」「好奇心」が引き出されて、自ら十分に取組みの中で、豊かな学びや成長につながる保育を展開していきたい、また、こどもをキーワードに集う人々がつながり、共に育ち合う場としていきたい」と語った。

2013年4月11日新園舎3階ののりのホールで、第



献堂式&レセプション



1回入園式が行われた。幼保連携型認定こども園として、幼稚園は定員200名、保育園は定員60名であり初年度の園児数は250名、教職員数は45名であった。2013年度から2014年度までは幼稚園及びこども園園長は根津美英子、保育園園長は元公立保育園園長の高橋和子が担当。

開園1年目の教職員数は単独の幼稚園の時の3倍に増えた。新規教職員も多く、加えて新園舎ということもあり、すべてが初めてへの挑戦であった。開放的な広い新園舎で、子どもたちはのびのびと挑戦を繰り返し、大人は戸惑いの日々であった。園庭は遅れて夏に完成する。植える木々の選定にも出かけていき、園庭奥に大きな山、手前に小さな山が出来上がる。

旧幼稚園の時代から始まっていた「子どものアトリエ」は1階にアトリエスペースが出来たことで、大学との連携の下、豊かなアート活動が展開され、「アトリエのあるこども園」として保育誌にも取り上げられた。2013年に大改革を行ったのも束の間、2015年には、こども・子育て支援新制度の大波が押し寄せ、様々な仕組みやシステムが大きく変わる事となる。

幼保連携型認定こども園は幼稚園、保育園の二つの認可から単一の認可となる。2015年度より1号認定（短時間保育）定員180名、2号・3号認定（長時間保育）定員90名となる。2017年度現在、神さまの愛の下、未来そのものである272名の子どもたちと、子どもたちの力強い自分づくりを応援する50名の教職員がこども園で共に生活を創りあげている。

創立から69年、こども園として5年の歩みをお守りくださった神さまに感謝するとともに、これからもみ心にかなうこども園として豊かに用いられることを切に願う。



新園舎施設2階保育室

## 幼稚園からこども園へ

のびのびのば園 主任 浦尻 友紀

関東学院のびのびのば園は幼稚園として35年歩んできた関東学院野庭幼稚園からこども園として新たなスタートをして6年目を迎えました。

園創立の時とは時代が変化し、少子化の波は強まるばかりの2000年代には近隣の野庭団地も高齢化が進み、野庭の地域も子どもが減少する傾向にあり、園児獲得が厳しい現実がありました。ところが夫婦共働き世代も多くなったことで保育園の需要はあり、横浜市ではその時期、待機児童0を目指していました。それに応えるように、幼稚園として横浜市型の預かり保育を始めることになり、7時半から18時半までの保育が行われることになりました。また、2歳児保育を始めるなど、働く保護者にとっても選ぶことができる幼稚園として変化し、ついに幼保連携型認定こども園へと移行することになったのです。

子ども園へ移行するにあたり、園舎の大改築工事があり、給食室、ランチルームの増設、乳児受け入れのため調乳室、トイレの設置、保育室の壁をはずしオープンな保育室へと環境も大きく変わりました。

新園舎が出来上がり、2012年、いよいよこども園としてスタート。ロータリーも造られ、車での登園もしやすくなったり、完全給食になったり、保護者のニーズにも応えられることが増えました。同時に保育体制や、私達の働き方にも著しい変化が起こります。教職員が倍以上の人数に増え、出勤体制もシフト制になりました。日曜、祝日、年末年始以外は開園、朝7時から夜8時までの長時間保育となり、教職員にとっては混乱と戸惑いの連続でした。教職員での話し合いの時間も減り、限られた時間の中でコミュニケーションをとっていかねばなりません。

保護者のニーズに応えることが先行しているような気がして何を大切に保育していくべきなのか、葛藤することも多かったように思います。しかし、目の前にいる子どもたちのために今できること、それは心を込めた保育をすること、それを精一杯やることだと



信じて教職員で力を合わせてきました。

こども園となっても、遊びを中心とした保育・教育内容は変わりません。「やってみよう」「表現しよう」「大切にしよう」この3つの保育目標を掲げました。子ども達の思いを大切にする保育・教育です。自分のやりたいことを自ら考えて取り組む、その楽しさを十分に味わってほしいと思います。また0歳児から5歳児までの子ども達が在園していますので、その関わりも大切にしています。園庭で混ざり合って遊ぶ姿も見られますし、交流の場を作って一緒に散歩に出かけたり、活動を一緒にしたりすることもあります。異年齢の関わりではお互いにより刺激となり、思いやる気持ちも芽生え、育ち合うことができるように思います。

地域と連携していく園として、今年度から職員の中に地域担当をつくり、地域とのつながりを持つようにと考えています。また未就園児向けの保育「ぶどうの木」「ころりんひろば」を開室、関東学院大学教育学部の先生のお力もお借りし、楽しいプログラムに加えて、育児相談も受けています。現代の子育て世代に必要なこと、子育て支援とは何かを考えていく重要性を痛感します。

幼稚園からこども園へと変わっても、目指すものはなら変わることはありません。子ども達一人ひとりが大切な存在として愛されるキリスト教保育を基盤とし、主体的に遊びを見つけ、楽しみや喜びを仲間と分かち合う、まさに園名の通り「のびのび」と生活していける園でありたいと強く思います。幼稚園時代の先生方が築いてくださった大切なことを忘れずに、これからも教職員、保護者の方々と心を通わせて、夢と希望と愛に満ちた温かいこども園を目指し、教職員一同力を合わせていきたいと思っています。





# ◆ 学校法人関東学院および関東学院各校の役職者











関東学院各校は歴史の中で設立、改称、改組を繰り返し、現在に至る。その創立と運営に関わってきた役職者を学校教育法制定の制定前、後で分けて紹介する。

【学校教育法制定前】




































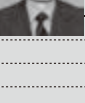



- ◆ 関東学院各校役職者 I (1984-1946年)
1. 横浜バプテスト神学校 1984年10月6日にA.A.ベンネットによる設立
  2. 東京学院には東京中学院・東京学院が含まれる






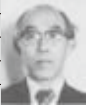
















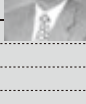
















【学校教育法制定後】

- ◆ 関東学院各校役職者 II (1947-2017年)
- 第一条 この法律で、学校とは、小学校、中学校、高等学校、中等教育学校、大学、高等専門学校、盲学校、聾学校、養護学校及び幼稚園とする。
- ※ 現在の小学校教育6年、中学校教育3年、高等学校教育3年、大学教育4年となった

年		横浜バプテスト 神学校 校長	東京学院 学院長	理事長	学院長	備考	
1884	明治17	A.A.ベンネット				横浜バプテスト神学校設立	
1885	明治18						
1886	明治19						
1887	明治20						
1888	明治21						
1889	明治22						
1890	明治23						
1891	明治24						
1892	明治25						
1893	明治26						
1894	明治27	J.L.デーリング				東京中学院設立(築地)	
1895	明治28		渡瀬寅次郎				
1896	明治29						
1897	明治30						
1898	明治31						
1899	明治32				渡瀬寅次郎 *		東京学院に移転・改称(牛込)
1900	明治33						
1901	明治34						
1902	明治35						
1903	明治36				E.W.クレメント		
1904	明治37						
1905	明治38						
1906	明治39						
1907	明治40						
1908	明治41	WB.パーシュレー					
1909	明治42						
1910	明治43		H.B.ベニンホフ				
1911	明治44						
1912	大正元年				J.F.グレセット		
1913	大正2						
1914	大正3						
1915	大正4						
1916	大正5						
1917	大正6						
1918	大正7						
1919	大正8		C.B.テンネー				
1920	大正9			C.B.テンネー *		坂田 祐	
1921	大正10						
1922	大正11						
1923	大正12						
1924	大正13						
1925	大正14						
1926	大正15						
1927	昭和2			渡部 元 *		C.B.テンネー *	
1928	昭和3					財団法人 関東学院中学部になる 東京学院が合併し、高等学部、神 学部となる	
1929	昭和4						
1930	昭和5						
1931	昭和6						
1932	昭和7			R.H.フィッシャー			
1933	昭和8			W.アキスリング			
1934	昭和9						
1935	昭和10						
1936	昭和11						
1937	昭和12			渡部 元			
1938	昭和13						
1939	昭和14						
1940	昭和15						
1941	昭和16						
1942	昭和17						
1943	昭和18						
1944	昭和19						
1945	昭和20			坂田 祐 *			
1946	昭和21						

## Ⅱ 関東学院各校役職者 (1947-2017年)

年	理事長	学院長	大学長	短大学長	中高
1947:昭和22		(坂田 祐)			清水 武 *
1948:昭和23					坂田 祐 *
1949:昭和24	W.A.キスリング 		白山 源三郎 * 坂田 祐 *	坂田 祐 	清水 武 
1950:昭和25					
1951:昭和26					
1952:昭和27					
1953:昭和28					
1954:昭和29	W.M.フリデール 		白山 源三郎	白山 源三郎 *	
1955:昭和30					
1956:昭和31					
1957:昭和32				相川 高秋 	
1958:昭和33					
1959:昭和34	坂田 祐 				
1960:昭和35					
1961:昭和36					
1962:昭和37					
1963:昭和38					山本 太郎 
1964:昭和39					
1965:昭和40		白山 源三郎 *			
1966:昭和41				相川 高秋 * 	
1967:昭和42					
1968:昭和43	白山 源三郎 * 高取 寿男(代理) 千葉 勇 	富田 富士雄 	大道寺 達  (高野 利治) 岡本 正	林 淳三 	
1969:昭和44					
1970:昭和45	大内 孝司				友井 篤 
1971:昭和46	加藤 亮三 		大道寺 達 * 岡本 正		
1972:昭和47					
1973:昭和48					
1974:昭和49					
1975:昭和50				高野 利治 *	
1976:昭和51					
1977:昭和52					
1978:昭和53	高野 利治 	柳生 直行 	高橋 賞 	林 淳三 *	
1979:昭和54					
1980:昭和55					
1981:昭和56					水野 哲太郎 
1982:昭和57					
1983:昭和58					
1984:昭和59					
1985:昭和60					
1986:昭和61					
1987:昭和62					
1988:昭和63					
1989:平成元年		B.L.ピンチマン 		内藤 幸穂 * 	下田 哲 * 
1990:平成2					
1991:平成3	内藤 幸穂 				平塚 敬一 
1992:平成4					
1993:平成5		石田 昭義 		伊香輪 恒男 	小玉 敏子 
1994:平成6					
1995:平成7					
1996:平成8					
1997:平成9		小川 圭治 		鴻池 淳志 	吉田 博 
1998:平成10					
1999:平成11					
2000:平成12					
2001:平成13					
2002:平成14		松本 昌子 			
2003:平成15					
2004:平成16					富山 隆 
2005:平成17					
2006:平成18		森島 牧人 		松井 和則 	
2007:平成19					
2008:平成20					
2009:平成21	飯田 嘉宏 			大野 功一 * 	
2010:平成22					
2011:平成23					
2012:平成24					
2013:平成25	増田 日出雄 				
2014:平成26		小河 陽 		規矩 大義 	
2015:平成27					
2016:平成28					
2017:平成29					

六中高	小学校	六小	六こども園	のぼ園	備考
		坂田 祐 	中居 京 		新制中学(高校)設立 教会幼稚園の開園 大学・小学校の設立  短期大学部を設置
	坂田 祐 *				
栗澤 竹雄 					三春台教室(小)開設 高等学校を六浦校地に設置、中学部は中学校・高等学校に改組、六浦小学校に改称、分教室は小学校になる  短期大学に改組
	清水 武 *				
岩橋 幸雄 	水船 六州 	下平 千太郎 	広井 修 		女子短期大学に改称
	下平 千太郎 *			下平 千太郎 *	野庭幼稚園の設立
	柳生 直行 *	柳生 直行 		下田 哲 *	
	白根 新治	佐々木 敏郎 			
石田 昭義 			林 淳三 	白根 新治 * 	
				大島 良雄 	
				村上 頭 	
	水野 哲太郎 		下田 哲 		
	高野 進 		小玉 敏子 		
永野 肇 		所澤 保孝 	朝倉 陸夫 		
		森島 牧人 	所澤 保孝 * 	所澤 保孝 	
落越 道彦 	清水 元 	島田 正敏 	(根津 美英子)	帆苅 猛 	
	名取 俊夫 		根津 美英子 	松田 和憲 	
河合 輝一郎 	岡崎 一実 	森島 牧人 * 			のびのびのぼ園を開設 六浦幼稚園を幼保連携型認定こども園で開設
黒畑 勝男 		石塚 武志 		河合 輝一郎 * 	
		澤 章敏 		井上 恵子 	

## ◆ 坂田記念館展示 『坂田祐の足跡』



白虎隊隊長 日向内記(祐の祖父)と藩主 松平喜徳  
藩主が元会津藩士平野吉重(中村富造)と日向ミエの縁を取り持った



1892(明治25)年 14歳 毛馬内高等小学校二年終了  
[中央が坂田祐]  
優等賞を授与されるも家系困難のため翌年退学した



1896(明治29)年 18歳  
足尾銅山時代

学業を断念してもなお青雲の志を抑えきれず上京し、東京、横浜、横須賀、浦賀を転々として職を求め労働に携わったが勉学に都合よい職はなく、横浜から徒歩で栃木県の足尾銅山へたどり着き、銅山の電気技師の職を得て、明治31年7月まで働いた



足尾銅山時代



1899(明治32)年 22歳  
陸軍教導団卒業、陸軍下士官に任官、近衛騎兵連隊付となり、足尾銅山に帰省



1899(明治32)年 21歳 陸軍教導団(陸軍下士官養成学校)  
騎兵科生徒隊の入団試験に合格(前列中央)



1906(明治39)年4月 29歳  
坂田チエ(18歳)と結婚  
坂田祐となる(旧姓中村)



1901(明治34)年 23歳  
陸軍騎兵学校学生  
乗馬:富士号  
陸軍騎兵学校に選抜、  
首席で卒業。明治天皇  
恩賜の銀時計を拝受

明治37年 日露戦争が  
勃発し弘前の第八師団  
騎兵連隊に入隊、大阪  
から愛馬と共に大連へ  
出帆し幾度かの激戦を  
経て明治39年に凱旋



1914(大正3)年 白雨会7名と内村鑑三先生(中央)



40歳当時の坂田祐



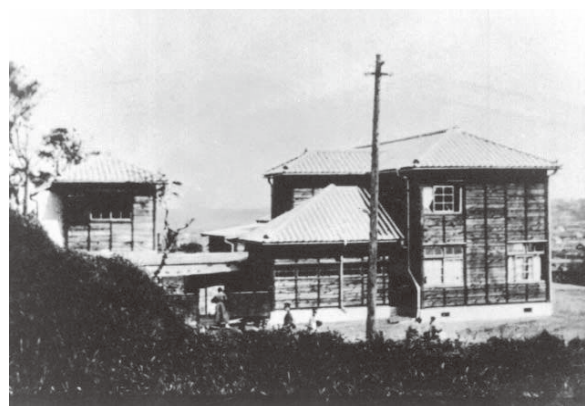
東大教授 ケーベル博士  
坂田の大学哲学科宗教学の恩師



第一高等学校受験写真



1920(大正9)年 中学関東学院最初の校舎  
小学校側の通路。普門院の前の道に当時は市電  
が走っていた



1919(大正8)年 中学関東学院設立当時の仮校舎  
146人の生徒の授業や礼拝に使われ、後に寄宿舎となる

創立以来続けられた教職員の聖書研究会  
(机向かい側右から)内海、高田、安村、  
グレセット、鈴木、田口、坂田、佐々木  
(机のこちら側左から)フィッシャー、西岡、  
大橋の諸氏





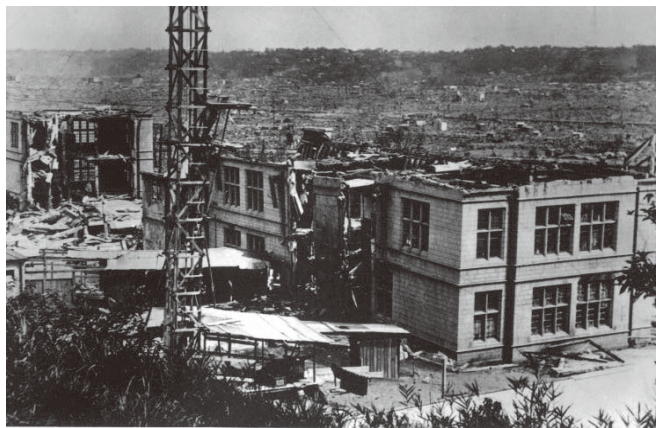
**関東学院設立当時の理事**

(後列左から)J. F. グレセット、坂田祐、ホルトム  
(前列左から)渡部元、C. B. テンネー、植山直樹、  
高橋楯雄



**1922(大正11)年の教職員**

(前列左から)西岡、大橋、フィッシャー、高田教頭、坂田院長、  
グレセット、コベル、佐々木、角田



1923(大正12)年9月1日の関東大震災で崩壊した学院本館



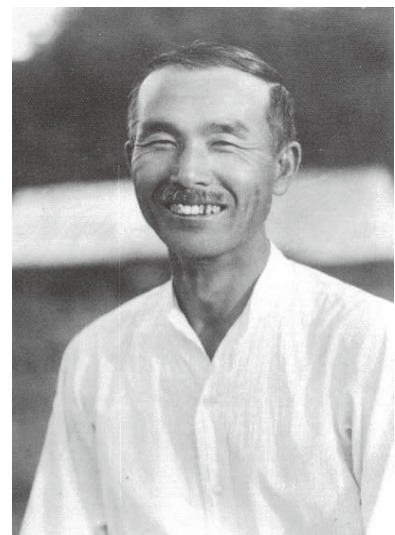
1924(大正13)年 生徒と共に



アメリカ合衆国にて1924(大正13)年  
アブラハム・リンカーンの誕生の地ホッジ  
ビルを訪れたとき。先生は歴史上の人物の  
中でリンカーンを最も尊敬していた



坂田祐 40歳頃  
1998年に作成されたポートレート  
坂田記念館入口に展示



1930(昭和5)年春  
戦前の卒業生にとって忘れ得ない三崎  
諸磯海岸の『三崎寄宿舎』  
特に自由週間に、普段は謹厳そのもの  
で滅多に見られなかった笑顔が懐かし  
く浮かんでくる

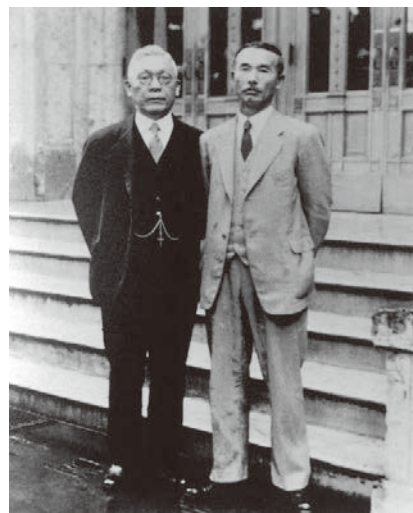


1941(昭和16)年  
佐々木トシと再婚



三崎寄宿舎

毎朝国旗が掲揚され、その後朝の礼拝が行われ、寄宿舎の一日が始まった。生徒と共に楽しそうに食事をしておられる先生が見られる



1935(昭和10)年  
軍人坂田を基督教の信仰に  
導いた木村清松師と



1965(昭和40)年夏  
軽井沢の山荘にて



関東学院大学で講演のあと  
坂田祐 南原繁



ケーベル博士の墓前にて  
博士の愛誦の聖句を読む



1965(昭和40)年11月3日  
横浜文化賞を受領



1954(昭和29)年  
グレース記念講堂の前で  
関東学院大学学長退任  
この年、藍綬褒賞を受領



1965(昭和40)年春  
院長交替の祝賀会で挨拶される  
坂田先生



1965(昭和40)年  
坂田先生の米寿祝賀会がニューグランド  
ホテルで開催された



1965(昭和40)年  
橄欖会会員による米寿祝賀会



1966(昭和41)年  
米国レッドランド大学より名誉人文  
博士号を受領



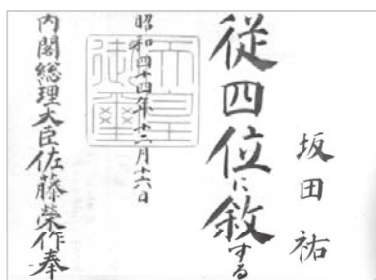
1969(昭和44)年 創立50周年記念式



1965(昭和40)年5月7日 88歳  
勲三等旭日中綬章

坂田 祐 年譜

年次	年齢	年譜
1878 (明治 11)	0	2月12日秋田県鹿角郡大湯村に生まれる。父中村富造 母ミエ
1888 (明治 21)	10	3月大湯尋常小学校卒業
1892 (明治 25)	14	鹿角郡毛馬内高等小学校 2年修了 不老倉銅山にて働き家計を助ける
1896 (明治 29)	18	単身上京、職を求めて足尾銅山に職を得て2年間働く
1898 (明治 31)	20	徴兵適齢、8月1日 陸軍教導団入学
1899 (明治 32)	21	陸軍教導団騎兵科卒業 騎兵軍曹に任官 近衛騎兵連隊付を拝命
1900 (明治 33)	22	陸軍騎兵学校入学
1901 (明治 34)	23	騎兵学校首席で卒業し明治天皇からの恩賜の銀時計を拝受 東京YMCAにて木村清松牧師の説教を聞き、求道者となる (父死去)
1902 (明治 35)	24	陸軍士官学校の馬術教官となる
1903 (明治 36)	25	5月3日バプテスマを受けて、四ツ谷バプテスト教会員になる
1904 (明治 37)	26	東京学院高等科に入学。日露戦争勃発、召集され6月弘前市第8師団騎兵連隊に入隊、10月大阪出港し大連へ、奉天会戦に従軍 (母死去)
1906 (明治 39)	28	日露講和成立 原隊に帰還し、金鷄勲章功七級、勲七等青色桐葉章受章 坂田チエと結婚し坂田に改姓
1907 (明治 40)	29	東京学院中等科4年に編入
1909 (明治 42)	31	東京学院中等科卒業し、第一高等学校入学 在学中 内村鑑三門下に入り「白雨会」結成
1912 (明治 45)	34	同校卒業、東京帝国大学入学
1915 (大正 4)	37	同大学卒業、東京学院教師に就職
1919 (大正 8)	41	中学関東学院創立 院長に就任
1924 (大正 13)	46	テンネーとともに渡米
1927 (昭和 2)	49	財団法人関東学院組織される。東京学院 (高等学部、神学部) を合併し、中学関東学院は関東学院中学部となる。中学部、高等学部部長に就任。院長テンネー (神学部長兼任)
1937 (昭和 12)	59	関東学院院長に就任
1940 (昭和 15)	62	チエ死去、翌年佐々木トシと再婚
1949 (昭和 24)	71	大学開設 学長を兼任 (5年間)
1952 (昭和 27)	74	神奈川文化賞受賞
1954 (昭和 29)	76	藍綬褒章受章
1965 (昭和 40)	87	学院長退任、理事長継続 勲三等旭日中綬章、横浜文化賞受賞
1966 (昭和 41)	88	米国レッドランド大学より名誉人文学博士号を贈られる 『恩寵の生涯』出版
1968 (昭和 43)	90	理事長退任
1969 (昭和 44)	91	12月16日召天 三ツ沢墓地に埋葬



坂田祐の墓

渡辺武氏 (渡辺フォトアート) は長期間、関東学院三春台校地に関わり、記録・展示・出版用の写真撮影を担当されました。渡辺武氏が保存されていた貴重な写真を学院に寄贈いただき、今回の写真集に掲載しております。この場をお借りして学院へのご支援に感謝をいたします。 学院史資料室



# ◆ 坂田記念館所蔵資料 I. 関東学院関係



## 《三崎寄宿舍関係資料》

デジタルアーカイブに向けて準備されている資料の一覧に含まれる三崎寄宿舍に関する資料が興味深い。記録には夏休みに行われた合宿の記録が詳細に残されており、日誌に残されている訓練などからはその時代背景も伺うことができる。坂田先生の実践した教育の記録が残されているので坂田研究の対象としても有益と考える。

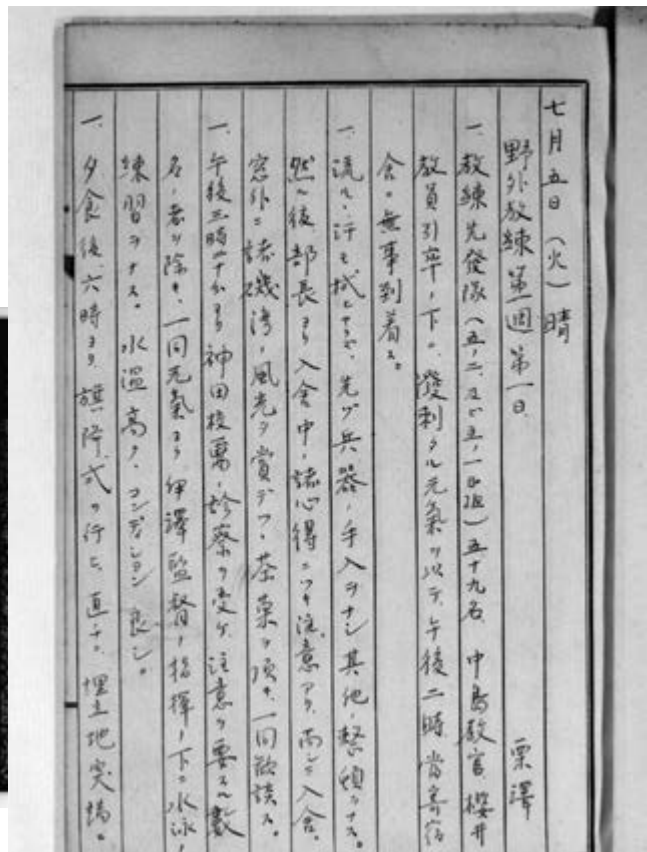
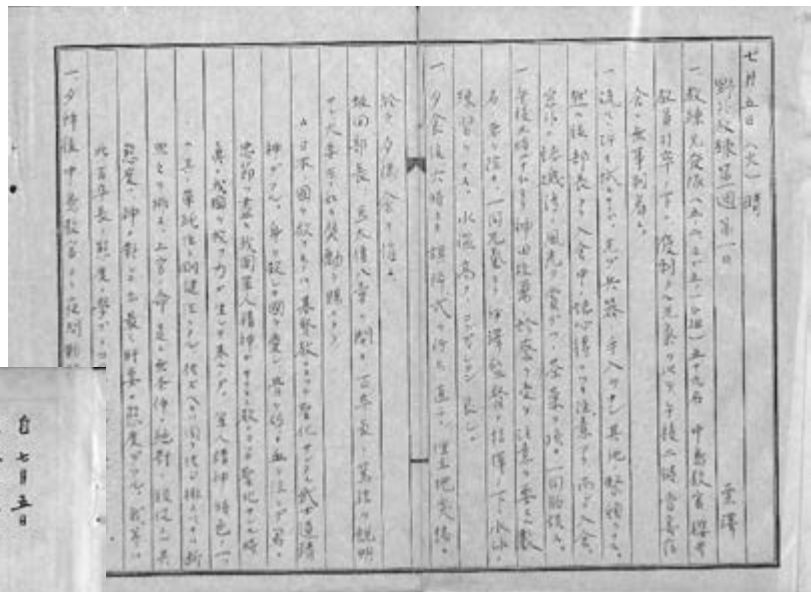
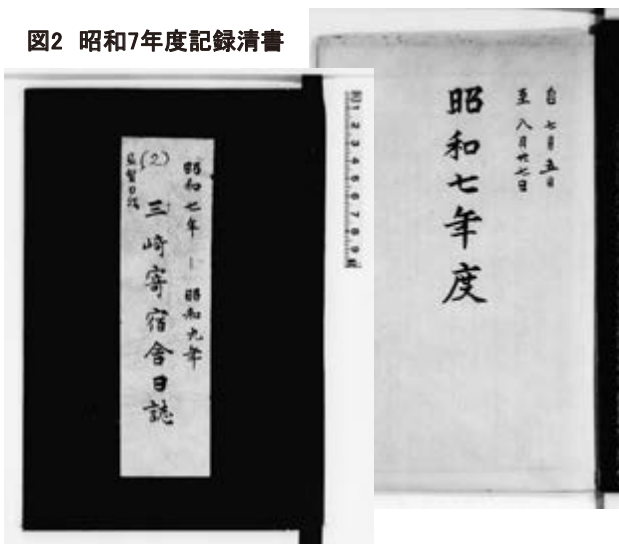
関東学院大学元宗教主任 元野庭幼稚園園長 大島 良雄

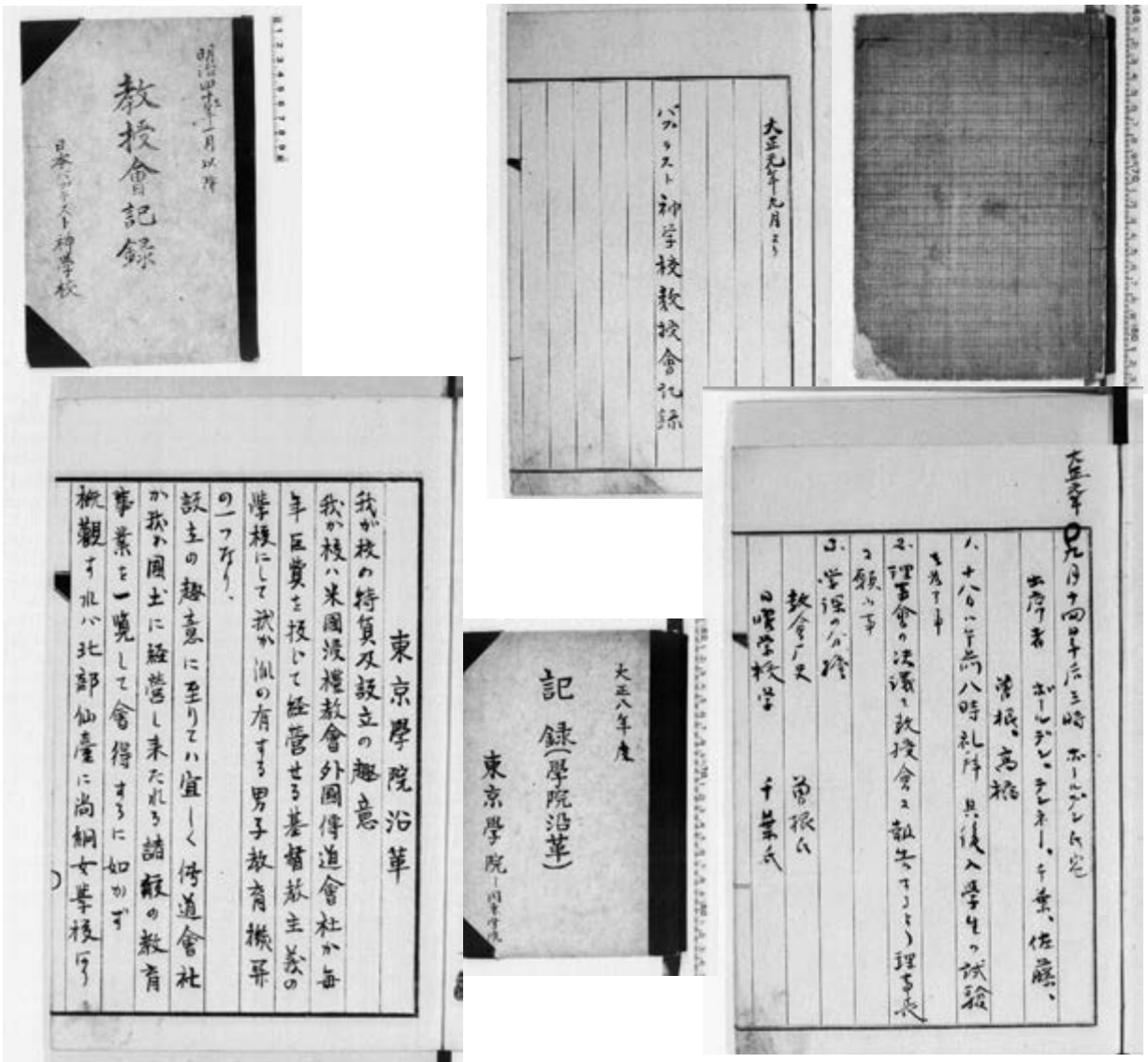
『三崎寄宿舍日記』は2部が保存されており、宿舎で記録されたらしき資料(図1)と清書分の記録(図2)がある。教育の記録として大切に残された資料であるが、前者には坂田祐の手による記録文章(文字)も見られる。清書分は本部(三春台)に、他は寄宿舍に置かれていた可能性が高い(未確認)。  
※ 図1と図2は同一日の記録

図1 昭和7年度記録原本



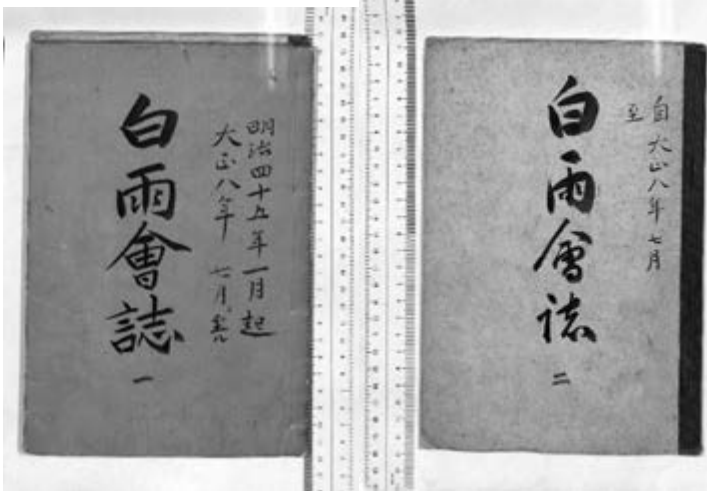
図2 昭和7年度記録清書





No.	発行年	タイトル	サイズ(mm)	ページ
1	1910(明治43)年	教授会記録 明治43年1月以降	240X154	93
2	1912(大正元)年	バプテスト神学校教授会記録 大正元年9月より	228X166	28
3	1919(大正8)年	大正8年度記録(学院沿革) 東京学院	233X169	20
4	1927(昭和2)年	自昭和二年四月 至同五年三月 高等學部日誌 關東學院	231X157	93
5	1927(昭和2)年	自昭和2年度始至昭和3年度終 高等学部教員会記録_関東學院	230X163	81
6	1928(昭和3)年	三崎寄宿舍日誌_関東學院_昭和3年度	233X156	57
7	1929(昭和4)年	教員會議録_昭和4年4月	230X167	94
8	1931(昭和6)年	関東學院三崎寄宿舍(S6-12)		10
9	1931(昭和6)年	関東學院三崎寄宿舍 事務日誌_ 第2号_昭和6年度~昭和8年度	236X166	47
10	1931(昭和6)年	三崎寄宿舍ノ重要事項記録 第一号_昭和6年度以降	236X166	46
11	1932(昭和7)年	三崎寄宿舍日誌_其の二_昭和7年~昭和9年	250X171	210
12	1933(昭和8)年	関東學院三崎寄宿舍 事務日誌_ 第3号_昭和8年度以降~10年度迄	237X163	74
13	1935(昭和10)年	三崎寄宿舍日誌_第三号_昭和10年以降・昭和11年8月迄	236X165	107
14	1937(昭和12)年	三崎寄宿舍日誌_関東學院_昭和12年6月	243X167	43
15	1937(昭和12)年	重要事項記録_第2号_関東學院三崎寄宿舍_ 昭和12年6月-昭和17年8月	233X164	58
16	1938(昭和13)年	三崎寄宿舍日誌_関東學院_ 昭和13年6月14日~7月1日	236X164	115
17	1939(昭和14)年	日誌_関東學院三崎寄宿舍_昭和14年7月5日~9月4日 ・昭和15年6月3日~昭和16年7月12日	236X165	102
18	1944(昭和19)年	日誌_関東學院三崎寄宿舍_昭和14年7月5日~9月4日・ 昭和15年6月3日~昭和16年7月12日	286X210	8

◆ 坂田記念館所蔵資料 II. 坂田祐関係



『白雨会日誌 一、二』

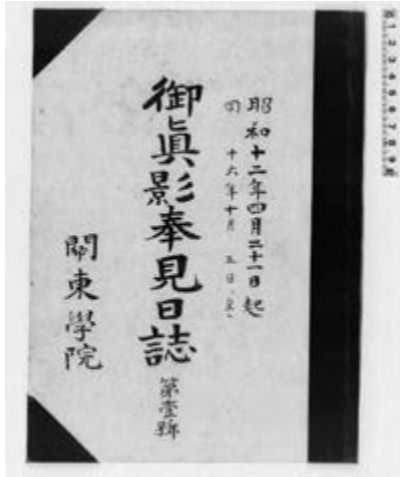
坂田他数名の内村鑑三門下生により組織された白雨会の記録。信仰による交友が毛筆で記され主に坂田が記録した。会員には南原繁、高谷道男、星野鉄男等がおり内村研究にとっても貴重な資料である。内容は『恩寵の生涯』で全文が紹介されている。

元定時制高等学校 教頭 花島 光男



No.	発行年	タイトル	サイズ(mm)	ページ
1	1897(明治30)年	工作課雇ヲ命ス 日給三拾六銭／足尾銅山古河鋳業		
2	1899(明治32)年	緒科優等之證／陸軍教導團		
3	1910(大正元年)年	白雨会誌 一 (大正元年-8年)		43
4	1910(大正元年)年	東京帝國大學での受講時限表		
5	1912(大正元年)年	大學予科第一部ノ学科ヲ修メ正ニ其業ヲ卒ヘタリ／第一高等学校長 從四位勲四等 農學博士 法學博士 新渡戸稲造		
6	1915(大正4)年	預言者 耶利米亞		
7	1915(大正4)年	紀念／東京帝國大學 文科大学 卒業紀念帖 大正四年七月		
8	1915(大正4)年	教員免許状 終身科・教育科・英語科／文部省		
9	1919(大正8)年	白雨会誌 二 (大正8年-昭和2年)		25

# ◆ 坂田記念館所蔵資料 III. 戦争と学院(社会情勢)



## 《御眞影奉戴申請書と奉安所》

1937(昭和12)年1月22日に文部大臣宛「御眞影奉戴申請書」提出。4月21日に県庁で御眞影を拝受した。奉安所は四つの塔の一つ約8坪(24㎡)の小室に縦約1メートル、横幅約1.2メートル、奥行き約80センチ、総檜材、内部は総桐材で造って奉納するようにした。

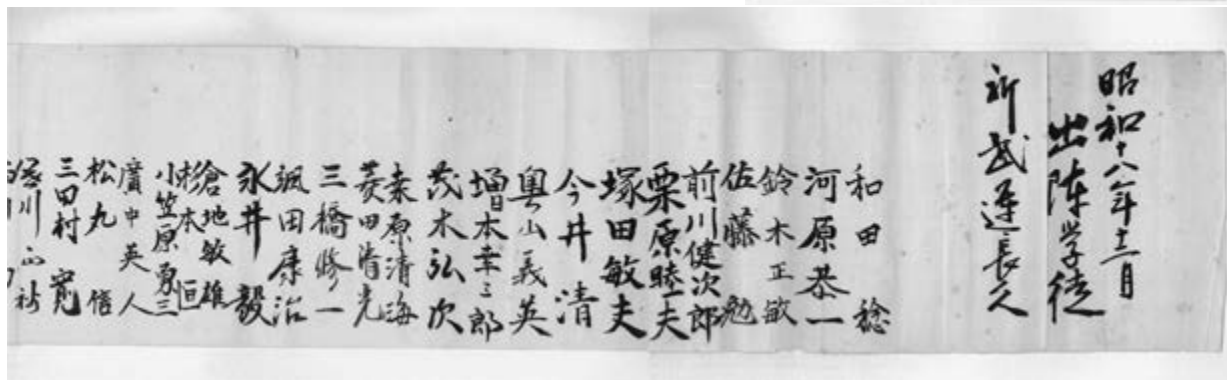
【敗戦後、私とその部屋をカウンセリングルームとして使えと言われ入って目に映ったものの概ねの寸法である】。奉安所の管理と御眞影奉見日誌二冊は院長が全て毛筆で記している。日誌は昭和20年1月26日までで、その26日に県の指示で(空襲激化のためか)県立第一、第三中学と共に田奈国民学校に奉遷して終わる。

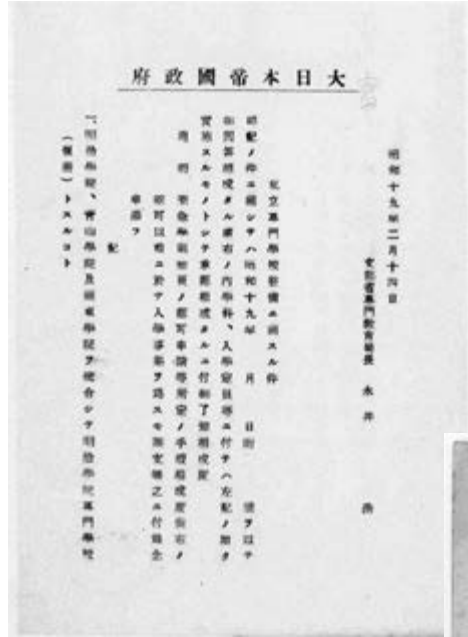
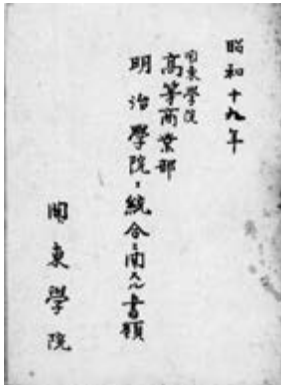
関東学院中学校高等学校 元宗教主任 海老坪 眞

## 《学徒出陣者署名を見て》

学徒出陣者署名を最初に見た時は未知の方々ばかりだと思って見た時、ハッと一人の人の署名が目飛び込んで来て、その先を見ることなく立ち止まった記憶があった。その方は市村雅弘さんで私も属していたハーモニカ部の先輩で、正月にはお互いの家を訪問していた仲だった。最近丁寧に見直すと署名120人の内18人は私の直接の先輩だったことが分かった。彼らほとんどは18回卒、私は20回卒。その18人の内の中田荘一さんは敗戦後関東学院本部経理課に勤務されていた方、横山創さんは私を航空機操縦者への道のあるのをおしえてくれた先輩であった。

関東学院中学校高等学校 元宗教主任 海老坪 眞

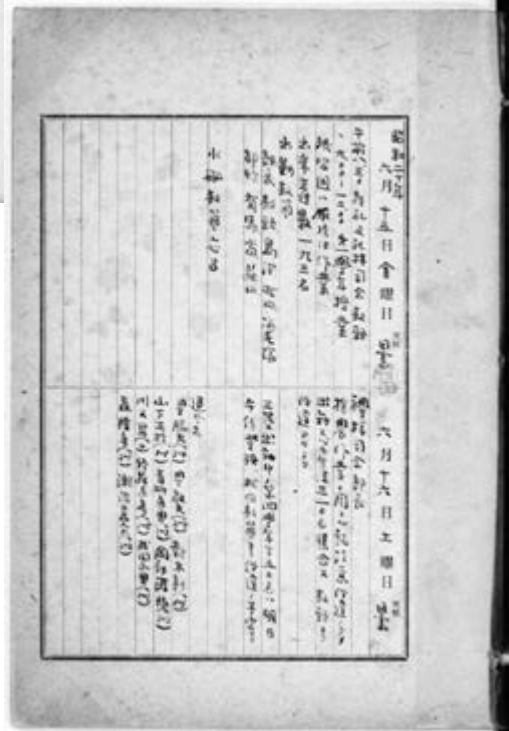
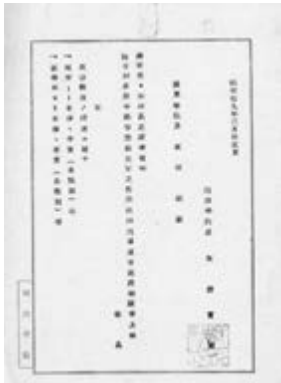




昭和十九年 関東学院高等商業部  
明治学院・統合二関スル書類

戦争末期に関東学院高等商業部は文部省の指示により、青山学院と共に明治学院専門学校に統合された。これにより、学生と高谷道男教授は明治学院に移った。その際、高谷教授の給与について明治学院より関東学院に問い合わせあり、学院はこれについて回答している。

元定時制高等学校 教頭 花島 光男

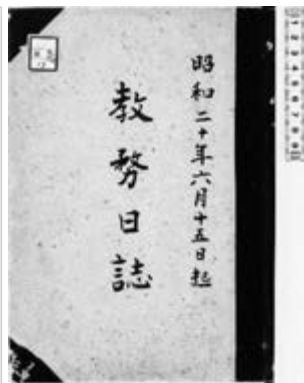


『教務日誌』

昭和二十年六月十五日起

戦争末期の45年6月より戦後46年5月までの中学部の教務日誌。戦争末期の緊張状態から戦後の教育環境の急激な変化、米兵の来校、グレセット宣教師の永眠と葬儀の記録など、学校内外の状況が記録されている。

元定時制高等学校 教頭 花島 光男



No.	発行年	タイトル	サイズ(mm)	ページ
1	1937(昭和12)年	御真影奉戴申請書綴_昭和12年1月22日	278X200	23
2	1937(昭和12)年	御真影奉見日誌第1号_昭和12年4月21日~同16年10月3日	270X198	31
3	1940(昭和15)年	「野外教練其他」昭和十五年五月以降 関東学院中學部	271X198	130
4	1941(昭和16)年	報國隊編成一覧表 神奈川県關東學院中學部(昭和十六年度)		
5	1941(昭和16)年	御真影奉検日誌第2号	278X203	30
6	1942(昭和17)年	「學校報國隊出動令二關スル綴」自昭和十七年一月 關東學院中學部	264X169	288
7	1943(昭和18)年	昭和18年12月22日 生徒出陣者署名(巻紙)		
8	1944(昭和19)年	「昭和十九年 關東學院高等商業部 明治學院二統合二關スル書類」關東學院	270X384	6
9	1945(昭和20)年	「教務日誌」昭和二十年六月十五日起	243X171	78
10	[不詳]	箱根報國寮 勤勞奉仕施設 神奈川県		
11	[不詳]	滿蒙開拓青少年義勇軍募集		

此方で紹介している画像の多くは、デジタルアーカイブによる公開を目指して、現在、準備を行っている処理途上の資料の一部分です。

坂田記念館で公開に差し支えない範囲で一部の資料を展示しております。展示物を含め、個々の資料について一般公開はしていません。展示の範囲で閲覧ください。

著作権の許諾などの準備が終了していない資料ですので、複写(撮影を含む)などについて、お問い合わせをいただきましても御要望にお応えできません。ご了承下さい。

学院史資料室

## 学院史資料展 2017

# 「建学の精神と校訓『人になれ 奉仕せよ』の教育」

のびのびのば園からの報告

## 「ひとりひとは特別です」～保護者の活動を通して～



のびのびのば園はたくさんの保護者や地域の方々に支えられています。

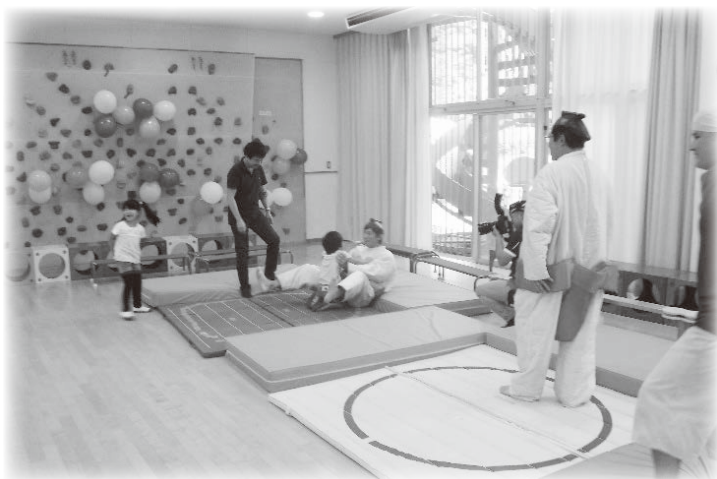
お母さんを中心としたコーラス部の方々の活動は園の大きな支えとなっています。歌う事の好きなお母さん方が自主的に集い、練習を重ねて子ども達のお誕生会で披露して下さいます。子ども達の大好きな歌や、季節の歌を取り入れながら、時には園児と教職員の共演もある楽しい時間となっています。

今年度からはお父さんとお爺ちゃんの「おやじい～の会」が発足されました。「こども達の為に何かできる事から始めたい」という気持ちで今年度はその初の試みとして、園庭のブランコの塗装や草刈りをして下さいました。



9月2日には「こども園創立5周年記念感謝デー」を行い、700人以上の来場者と共に笑顔と感謝の溢れる1日を過ごす事が出来ました。

保護者を中心とした感謝デー委員の方々が、教職員と一緒に当日までの準備を進め



て下さり、当日は「おやじい～の会」を中心にした、相撲の着ぐるみを着てのお相撲ごっこに、子ども達は大喜びでした。多くの卒園児や保護者や地域の方々が来園し、地域に見守られて成長してきたのびのびのば園を実感することができました。今後も保護者の方々の協力を得ながらこども園としての歩みを続けていきたいと願っています。最後に学院の様々な力をお借りすることもできましたことに、連携の恵みを感じた1日でもありました事を感謝し、ご報告させていただきます。

関東学院のびのびのば園 副園長 平 幸子

## 六浦こども園からの報告

## 友だちと力を合わせて ～おりぶ祭での年長組の子どもたちの活躍～

こども園では、毎年『おりぶ祭』というバザーが行われます。同窓会を兼ねていて、地域の方々にも開かれているお祭りです。保護者の方は学年で担当するブース（食べ物・献品・ゲーム）が決まっています。シフトを組んで全員の方が参加して下さるようになっています。

今年は、初めての試みとして年長組の子どもたちが『おりぶ祭のスタッフ』として参加することになりました。例年は、自分たちが作った手作りクッキーをお店屋さんになって販売していたのですが、今年は自分たちのできる事を考えて大人の人たちと一緒に、おりぶ祭にいらした方たちを楽しませようと考えました。まず、最初に子どもたちと昨年の事を思い出しながらどのようなコーナーがあったのか確認しました。そして、自分たちがやりたい内容・できる事は何か（自分が経験して楽しかったイメージや挑戦も含めて）クラスで話し合いをしました。それは、決して自分たちのためではありません。お祭りにいらっしゃる、まだ出会ったこともない人たちのためなのです。見えない事柄に心を遣うことは子どもにとって容易いことではありませんが、そこは経験と想像力がものをいいます。年長組の子どもたちは、友だちと一緒に心と力を合わせて、『おりぶ祭のスタッフ』としてできることをいくつか出し合いました。出てきた内容は3Fのりのりのホールで行われる保護者バンドや小学校の合唱団などを紹介する司会者、2Fの外デッキで走るミニSLの乗車チケットを配る役、ランチルームで食べ物を配るウエイトレスさん、3Fのゲームコーナーのチケット交換役などでした。どうやら、日頃、自分たちが行っている遊びの中で楽しんでいることや大好きなことを土台にしてやってみたいと思うものを選んだようです。やる事が決まると早速、子どもたちは必要なものを作り

始めました。それぞれの役になるために必要な衣装や物を楽しみながら、工夫して仲間と一緒に作って



いました。少しずつ、準備したものが形になってくると、互いに誘い合い、また、他の学年の子どもたちも誘って遊ぶ姿がありました。小さいクラスの子もたちはお祭りのようになっている様子にワクワク！ウ



キウキ！とても喜んでくれました。その体験は、年長組の子どもたちの自信につながりました。

おりぶ祭

当日は、本当にたくさんの方々が園に足を運んで下さって、どのコーナーも大賑わいでした。『おりぶ祭のスタッフ』になった子どもたちは、どの子も嬉しそうに自分の役をこなしていました。そして、終わった後は満足そうな顔に変わっていました。私たちは、子どもたちが人を喜ばせることを自分の喜びにできる人たちになってほしいと心から願っています。

関東学院六浦こども園 副園長 鈴木直江



## 児童による礼拝奉仕



「これから全校礼拝を始めます」

司会者の声が礼拝堂に響きます。続いて子どもたちのさんびかを歌う明るい元気な声が礼拝堂をつつみこみます。

小学校では毎週金曜の朝に全校児童が礼拝堂に集まり、礼拝をまもりまします。全校児童でこころを合わせてさんびかを歌い、聖書のことばに耳をかたむける礼拝のときは豊かな恵みのときです。全校礼拝で司会、そして聖書朗読とお祈りの奉仕をするのはキリスト教委員の児童、オルガン奏樂は高学年の希望者です。

6年ほど前までは司会や聖書朗読とお祈りの奉仕は教員がになっていました。あるとき「児童にまかせてみないか」という意見が教員から出され、それでは、とキリスト教委員の児童が務めたところ……。児童の司会で進められる礼拝は、また児童のことばでなされる感謝や願いの祈りは、力強いメッセージとともに子どもたちのこころの中にとけこんでいきました。やがて上級生が奉仕をする姿を見てきた下級生は、自然とその奉仕を引き継いでいきました。ここ3年ほどは児童が礼拝の奏樂奉仕をおこなう週もできています。



児童が礼拝でさまざまな奉仕をになう前には、家庭で、また学校で、たびかさなる練習のときがあります。その練習のときがあるからこそ、礼拝では落ち着いて奉仕をする姿があります。そう考えると礼拝奉仕は練習のときからはじまっている、といえるのかもしれませんが。

児童一人ひとりがあたえられた場所のできることをおこなう奉仕。これからも礼拝での奉仕が神と人にとに喜ばれることを願います。

関東学院小学校 教頭 辻 望





建設中の新しい女子寮

## 六浦小学校からの報告 創立25周年を迎える ティワタ寮

2017年8月16日（水）～22日（火）六浦小学校の第16回タイ訪問団一行は、今年もタイ・カレン族の村で交流を行いました。今年の参加は大石明德さん（第40回生ヨシュア・ヨナタン組）・2年生の雫さん（第68回生ホセア・アモス組）親子一組でした。大石親子は、昨年も参加し、2年連続です。私は、大石明德さんが5・6年の時の担任でした。昨年、大石さんがタイ訪問団に参加したのは、小学生の時にカレン族の話を私から聞き、それが頭の片隅にあり、20数年たって娘さんが学校からもらったタイ訪問団のお知らせを見て、「これだったのか」と記憶がよみがえり、ぜひ行ってみたいと思ったからだったそうです。

六浦小学校が、カレン族と交流を持つきっかけとなったのは、元六浦中高聖書科教員の大里英二先生が、宣教師となるために六浦中高を退職し、日本バプテスト同盟海外伝道協会からタイに派遣されたことにありました。当時、大里先生と友人であった私は、六浦小学校の先生方4人（原・島田・鶴崎・山本）と共に大里先生に会いにタイを訪れました。すると、大里先生は私たちを、山岳民族のカレン族の村であるムシキーに連れて行ってくれました。山奥の村で寮生活をしているカレン族の子どもたち、キリスト教を伝えるために一人で村に入り共に生活をしていた女性宣教師との出会い、カレン語・タイ語・英語・日本語と言語は異なれども同じ福音が記されている聖書を共に読み、祈りを捧げた経験が、六浦小学校のタイ訪問団のきっかけとなりました。

六浦小学校で初めてタイを訪れたのは1993年9月。この年の1月にティワタ村のファイナムカオ教会と寮は第一歩を踏み始めていました。そして、初めてティワタ村を訪れたのが1996年3月。牧師であるダウ先生との出会いもこの時でした。ダウ先生には「一人でも多くの山の子どもたちに教育を受けさせたい。そし

て、いつか、山の上に教会を建ててキリストの光を輝かせたい」という夢がありました。ダウ先生は、祈り続けてきました。ティワタの村に、教会を建て、寮を建てていきました。子どもたちはそこで、聖書を学



ダウ先生の息子とダウ先生と石塚教諭

び、勉強し、学校に通いました。そして、25年の間に、多くの卒業生が村を巣立っていきました。



チェンマイに集まった25人の卒業生

今回、たくさんの卒業生たちに出会いました。息子を持つ母親、町役場の職員、寮の運営のスタッフ、オムコイの聖書学校の学生、オムコイの学校の教師、チェンマイの聖書学校の学生、大学生、

レストランアルバイト…。そして、その一人ひとりが「いつか村に帰って子どもたちの教育に関わる仕事がしたい。子どもの時の教育が最も大切だから」という思いを強く持っていました。25年経って、ダウ先生の夢を、神さまはかなえて下さっています。ティワタの教会・寮から人が育ち、教会は、今、ティワタ村の山の上に建ててキリストの光を、村に、そして、日本にある六浦小学校にまで輝きを放っています。

2017年12月のティワタ村の新しい女子寮の献堂式、そして、2018年1月の創立25周年の礼拝と式典が、神さまの栄光を表し、神さまに心から感謝する日となりますように。そして、ティワタ村のファイナムカオ教会と寮が、益々キリストの光を放っていきますように、そして、これからも、六浦小学校と共に喜びを分かち合う交流が続きますように、祈ります。



ティワタ寮の子どもたちと訪問団のメンバー

関東学院六浦小学校  
教頭 石塚武志

## 中学校高等学校からの報告

# オーケストラ部の活動を通して

中学校高等学校にはマーチングバンド部とハンドベル部という、どちらも日本を代表する活動をしている2つの部活動があります。その中でオーケストラ部が設立されたのは2005年のこと。7人の中高生でスタートさせましたが、その年のうちに30人を超える集団となっていました。やりたいという生徒に恵まれたのは事実ですが、同時に楽器整備や練習場所等の環境面でのサポートを校長先生、事務長先生をはじめとする学校関係の皆様、保護者の皆様のご理解ご協力で、短時間で大きな部活動となっていきました。12年経った現在は中学1年生から高校2年生までの約130名で活動しております。



近年は学校行事や関東学院クリスマスコンサートのような学院行事、定期演奏会のほか、地域イベントでも演奏する機会に恵まれております。

6月に学校の地元伊勢佐木町6丁目商店街から依頼され、第13回ザキ祭りというイベントに出演しました。

日頃、室内で活動している私たちにとっては、梅雨の晴れ間の心地よい屋外での演奏は新鮮でした。それと共にホールでの演奏会とは違い、買い物ついでに立ち寄って下さり、音楽に足を止めて、だんだん聴衆が増えていくという経験。さらには、知っている曲を一



緒に口ずさんでくださる様子というのは、部員たちにとっても大きな刺激だったかと思います。



10月の終わりには、学校と隣接している公立小学校の全校児童に関東学院に来校していただく「オーケストラ鑑賞会」という行事が実施されました。昨年に続き2回目となります。(通算は4回目)日頃の演奏は同世代より上の皆さんに聴いていただくことが多いのですが、聴衆は全て小学生。選曲や内容も部員と私が話し合い工夫をしました。楽器紹介では小学生が知っている曲を演奏できるように準備。全体演奏では聴きながら、テーマの数を数える作業、小学校6年生2名に登場していただき、指揮者体験、全校児童の合唱に合わせてオーケストラが演奏。カラオケならぬ生オケの体験等の40分間。最後は小学校校歌をオーケストラで演奏し終演となりました。予想通りというか、予想以上に児童は音楽を身体で感じ楽しんでいる、私たちにあって、大変嬉しい反応。部員にとって、自分たちが奏でる音楽で、年下の子どもたちが楽しんでいる姿を見るのは、貴重な体験だったと考えます。



これからもオーケストラ部の演奏活動を通して聴衆の方楽しんでいただくこと。さらには「音楽」の持つ、コミュニケーションツールとしての重要性を生徒たちが実感できるよう、日々の活動を精進していきたいと考えます。

関東学院中学校高等学校 教諭 繁下拓也

## 六浦中学校・高等学校からの報告

# 奉仕のころは1日にしてならず

辞書でいう直訳的な“奉仕”は、「利害を考えずにつくす」や「献身的につくす」<sup>1</sup>ことを意味します。とかく自分が損をしないことを優先に考える世相にあっては、この意味を実現することさえ容易いことではありません。しかし、校訓の示すところの奉仕の意味はさらに深く、イエス・キリストを土台とした奉仕者たることを求めています。

六浦中学校・高等学校の1・2年生で実施される施設訪問は、この校訓をめざす教育として重要な役割を果たしています<sup>2</sup>。



1年生施設訪問(歌のプレゼント)

1年生の施設訪問は花の日に行われ、高齢者の方々の施設を訪れます。事前学習において、イエス・キリストはどのような人々に寄り添い、どのように接せられたのかを学び、全校生徒から寄せられた花や石鹸・タオルなどの献品をお届けします。各施設では交流を体験させていただくとともに、利用者の方の日常や施設の概要を知り、支え合うところを養います。

2年生では、事前学習において1年時に学んだ精神



2年生施設訪問(施設での学び)



を再確認した後、さまざまな福祉施設にご協力をいただき、施設内の整備営繕活動などの作業体験や利用者



2年生施設訪問(清掃活動)

の方のサポートを経験します。作業では想像以上の重労働があることや、施設が快適であるためにどのような見えないところでの苦勞

があるかを知り、また利用者の方との関わりでは、何をどのようにサポートできるのか、その戸惑いも経験します。同時に「ありがとう」と声をかけていただいたことばに、自分の果たせる役割を感じ、自分にもタラント(賜物)が与えられていて、それを活かす場があることを認識することもあります。

3年生以上になると、この下地を活かし、生徒がそれぞれ自分の関心や将来の職業進路に沿ったボランティア活動に参加していきます。精神的な土台づくりから育て、6年間で培われるところは、卒業後にも活かされ、継続的にボランティア活動に参加している卒業生も少なくありません。



東日本大震災以来、日本国内ではボランティア活動が再び活性化<sup>3</sup>し、キリスト教学校の生徒ではなくともボランティア経験があることは当たり前になってきました。そしてボランティアに対する考え方も多種多様であり、さまざまなボランティア形態が現れています。その中において、同じ活動をしていても、本校の卒業生には「イエス・キリストのように自分のタラントを社会や他者のために献げる者としてのボランティア」であってほしいと願います。

関東学院六浦中学校・高等学校 教諭 手塚裕貴

1. 新村出編「広辞苑第四版」岩波書店(1991)

2. 坂田祐著「悪魔の生涯」待農堂(1966)

3. 「ボランティア元年」は阪神淡路大震災を機にした1995年をいう。

## 大学からの報告

# 2017 年度東北ワークキャンプ（震災ボランティア活動）

2011 年以来、毎年継続して実施してきた東日本大震災復興支援ボランティア活動は、2017 年 3 月の神奈川県内二箇所（逗子市・南足柄市）での活動を一区切りとし、大学としてのプロジェクト活動を終了しました。

これまで活動の拠点としていた宮城県南三陸町志津川・中瀬町行政区の仮設団地も当初 100 世帯近い方々が生活を送っていましたが、今年の 8 月には 4 世帯を残すのみとなりました。志津川に新たに建設された三つの高台住宅地の災害公営住宅や戸建て住宅で大半の皆さんがあらたな生活をスタートされたのです。志津川も 10 メートルの盛土工事が進み新しい街づくりが着々とすすんでいます。大変微力ではあるものの、この復興の動きに少しでもかかわれたことはこれまで活動にかかわった学生、教職員にとって大きな喜びとなっています。

そのような一区切りを迎えた活動でしたが、6 年間に亘って蓄積した現地の皆様との絆を大切にしていきたいとの思いと、現地での活動に参加した多くの学生にすばらしい成果を残してきた結果を受け、今年度も学生支援室の活動として継続することができました。

今年度の活動は 8 月 8 日（火）～ 11 日（金）の日程で「復興支援ボランティア活動」中心から「大震災から学ぶ活動」中心に企画立案をしました。震災支援活動を長年続けてきた利府キリスト教会松田牧師の講話、東松島震災伝承館と同地での震災語り部のお話、復興がすすむ女川の見学、旧大川小学校跡、そして南三陸町志津川へとすすみました。志津川では、中瀬町行政区佐藤区長や元教育長勝倉先生から大震災にかかわるお話をおききました。

しかし、もっとも中身が濃かったのは中瀬町の多くの皆さんが移転された志津川西地区での交流でした。8 月 10 日（木）午前中はラジオ体操とおじゃっこ（茶話会）、午後は子供向けの「宿題お助け隊」その間に地域のお母さんたちの指導を受けながらの食事会の準備と地域の皆さんとの食事交流会。時がたったことによ

て震災当時のお話をいろいろ語ってくれるようになった方、あらたなコ

ミュニティー作りに苦勞されているお話、災害公営住宅での生活不安など現地では聞き取れない様々なお話に学生たちは熱心に耳を傾けていました。



震災伝承館で語り部さんの説明風景

フィジカルな災害復旧活動こそがボランティアという考えもありますが、心の交流を続けることもボランティアなのではないかと改めて気づかされた活動でした。今回も参加した多くの学生が、この活動を通じ多くの成果を得たと思います。そしてその成果が「人になれ 奉仕せよ」の校訓の意味を知ることにつながっていると思います。

最後に、お世話になりました宮城県利府町「キリスト教森郷キャンプ場」スタッフの皆様にご挨拶申し上げます。

関東学院大学 学生支援室 鈴木康夫



志津川町 震災前



志津川町 震災直後



新しい集会所の前

## 第一次世界大戦後（第二次世界大戦前）の「1919年」

—小川圭治学院長から触発されて想うこと—

関東学院 学院長付（学院史資料担当） 渡邊 茂

『関東学院 学院史資料室 ニュース・レター』第1号  
（創刊号、1999年6月発行）

この『ニュース・レター』が創刊された1999年は、日本社会の隅々で「世紀末」が語られていた頃で、個人的にはマーラーの交響曲を聴きながら、「19世紀末」の西欧近代文明の爛熟について考えていました。創刊号の発行人は小川圭治学院長でした。かつて、スイスのバーゼル大学でカール・バルトに直接師事した組織神学者の小川圭治先生が学院長に迎えられたことは、その当時、関東学院六浦中学校・高等学校教諭の一人であった私にとっても、新鮮な驚きでした。

なお、カール・バルトについて、例えばカトリックの若松英輔氏は「プロテスタントを代表する神学者として・・・その業績の質と量、影響力においてバルトが、新旧両教会を射程においても、二十世紀キリスト教界最大級の神学者であることは異論を俟たない」（『吉満義彦一詩と天使の形而上学』岩波書店、2014年、155頁）と述べています。

また、関東学院大学の富岡幸一郎教授は、その著書『使徒の人間 カール・バルト』（講談社文芸文庫版、2012年、362頁）において「日本のバルト研究の第一人者であり、日本カール・バルト協会や関東学院で御指導たまわった小川圭治先生が本年一月十七日に天に召された。畏怖もなくこのような本を著した自分をずっと寛容に見守り励まして頂いた頃を思い、小川先生の学恩に改めて感謝申し上げる」と記しています。

「1919年」は、そのカール・バルトが『ローマ書』[第一版]を刊行して第一次世界大戦後の世界に衝撃を与え始める年で、その消息は、小川圭治「解題—神学における近代主義の突破」（カール・バルト著『ローマ書講解 [下]』小川圭治・岩波哲男訳、平凡社ライブラリー、2001年）にも記されています。来年2019年は『ローマ書』[第一版]刊行100年でもあります。

## 『中学関東学院創立100年、坂田祐没後50年』

そして来年2019年は、現在の関東学院にとって「第三の源流」である中学関東学院創立の「1919年」から100年、坂田祐学院長が退任後に死去された1969年からの没後50年という節目の年を迎えます。（従来から「坂田祐院長」と表記される慣例もありますが、ここでは他の学院長との統一を優先し「坂田祐学院長」と記しました。）

その2019年は、「第一の源流」である横浜バプテスト神学校創立の1884年から135年で、「創立150年」まで「あと15年」という年になります。

小川圭治学院長は「私は、坂田先生から数えて十人

目の学院長であるが、就任のとき、「はじめての神学者学院長だ」と紹介された」（『ニュース・レター』創刊号、2頁）とご自身のことにも触れながら、「神学者」としての坂田祐に着目して記されていました。

京都大学ご出身の小川圭治学院長によって東京帝国大学出身の坂田祐学院長への学問的共感が表白されているとも受けとめられる文脈の中で記された「はじめての神学者学院長だ」と紹介された」という表現は、「関東学院 学院史」の観点からは補足的に修正されて然るべきではと存じます。（小川圭治学院長がご自身と坂田祐学院長との接点として「神学者学院長」という視点から学院史を振り返られるのであれば、日本プロテスタント・キリスト教史におけるバプテスト教会の日本人神学者〔神学教師〕である千葉勇五郎学院長〔第3代学院長〕こそ「神学者学院長」として、今日再確認できたら、と個人的には存じているからです。）

近代日本におけるバプテストの機関紙『基督教報』第528号（大正8年〔1919年〕10月30日発行、7頁）「教況」欄には、坂田祐学院長による「教報〔『基督教報』〕は近頃非常に発達した。殊に千葉〔勇五郎〕博士の文章は最も有益なものである」というコメントも、報告されています。（引用に際して、旧漢字を新漢字に改めました。以下も原則として同様です。）

明治・大正期のキリスト教界における代表的知識人である内村鑑三の講演要旨や植村正久の説教要旨も、折に触れて紹介されている『基督教報』紙上において、「千葉博士の文章は最も有益なもの」という高い評価は、単なる社交辞令であるとは思われません。

## 『1919年4月、中学関東学院創立時の式次第』

さて、坂田祐学院長の「1919年」の出来事で、今日個人的に再確認させられた事柄に、『基督教報』第500号（大正8年〔1919年〕4月17日発行、11頁）「教況」欄、「関東学院」についての以下の報告があります。

「入学志願者は合計三百十二名で、選抜試験の上一百四十六名を入学せしめ、之を四組に別けた。四月九日午前九時左の順序によつて始業式が挙げられた」と。

上記文中「左の順序」とは、「奏楽」・「聖書朗読」・「祈禱」・「讚美歌」・「勅語」・「君が代」・「告辞（学生へ）坂田院長」・「答辞 学生総代」・「頌歌」・「祝禱」の順。

この式次第は、「第一の源流」である横浜バプテスト神学校からの「創立100年」を記念することとなった1984年10月6日発行『関東学院百年史』（308 - 309頁）にも同じく『基督教報』第500号「引用」（厳密には「一部書き換え」）により掲載されています。（当時は、牧師で英文学者の柳生直行学院長の時代でした。）

上記プロテスタント・キリスト教礼拝形式の式次第の「讚美歌」と「君が代」の間に位置している「勅語」は「教育に関する勅語」（教育勅語）で大日本帝国憲法のもとで内閣総理大臣以下の国务大臣の副署がない例外的な詔勅として、1890年〔明治23年〕に発せられたものです。（「教育勅語」について、日本政治外交史研究の碩学 三谷太一郎氏の近著『日本の近代とは何であったか—問題史的考察』〔岩波新書、2017年〕「第四章 日本の近代にとって天皇制とは何であったか」においても、先行研究に基づき簡明に叙述されています。）

坂田祐学院長は、第二次世界大戦後の日本国憲法のもとでの「回想録」において、〈関東学院はキリスト教主義の学校であるけれども、日本の学校で、日本人を教育する学校であるから、この創立第一回の入学式に、日の丸の国旗をたて、君が代を斉唱し、教育勅語を奉読し、聖書朗読、祈禱をもって挙式した〉（『新編 恩寵の生涯』待晨堂、1976年、101頁）と述べています。この回想は、関東学院大学の「自校史テキスト」、『関東学院大学のあゆみ』（2017年3月発行、34頁）においても、前後の文脈も含めて引用されています。

普遍的なキリスト教の本質を神学的にも理解されていた坂田祐学院長が、（日本国憲法の時代になっても）「教育勅語」を肯定しているかのように回想していた事実は、冷静に再認識される必要があると存じます。

天皇の「神聖不可侵性」が体现された「教育勅語」は、21世紀の今日、キリスト教に基づく「知的共同体」としての関東学院で、確実に否定されるべきものです。

その上で〈関東学院は・・・日本の学校〉という志向は、「対米従属」への対抗軸になり得るとも存じます。

#### 「人は時代といかに向き合うか」

坂田祐と同じく内村鑑三の直弟子で、第二次世界大

戦後初代の東大総長（敗戦後に東京帝国大学は東京大学と改称）を務めた政治学者 南原繁が『新編 恩寵の生涯』「序文」（1966年1月12日付）に記した〈太平洋戦争中、著者〔坂田祐〕が軍の圧迫に抗して、あらゆる干渉から、学院を守り抜いたことは、記憶されているもの、と受けとめられ得ると存じます。〉という証言は、今日の関東学院にも向けられているもの、と受けとめられ得ると存じます。

東京大学法学部での南原繁の学問的遺産を継承する一人として三谷太一郎氏は、その著書『人は時代といかに向き合うか』（東京大学出版会、2014年）「あとがき」で〈「歴史主義」は歴史家の職業病であるが、それは一般人にも転移しやすく、しかもそれが高ざると歴史化されないもの、流動化されないもの、あえて言えば「永遠なるもの」を見失う恐れがある。さらにいえば、逆に歴史そのものを見失う恐れがある。「人」と「時代」とは本来別のものである。「人」は「時代」に解消されないし、「時代」はいかなる「人」とも同一化されない。「人」は歴史を書くことによって、あるいは歴史を読むことによって、すなわち「時代」を認識することによって、はじめて「時代」を超えるのである〉（同上、319 - 320頁）と記されています。

上記文中「永遠なるもの」という言葉からは先述したカール・バルトによる組織神学上の主張を想起されるかもしれませんが、ここでは前提となる『新約聖書』「パウロ書簡」の証言に、耳を傾けたく存じます。

〈今われわれが受けている、この世かぎりの軽い患難は、やがて、永遠の圧倒的な栄光に取って代られるのである。われわれは見えるものではなく、見えないものに目を向けている。見えるものは過ぎ去ってしまうが、見えないものは永遠に存続するからである。〉（「第二コリント書」第4章17 - 18節、『新約聖書』柳生直行訳、新教出版社、1985年、378 - 379頁。）

#### ◆ニューズレターNo.20収録記事に関する補足

中学校高等学校元宗教主任の海老坪眞先生より『青山寮』が戦前に建てられたというお話を伺いました。No.20にて紹介した『青山寮』は戦後に再建された寮です。先生に伺った内容を以下に紹介します。

青山寮はもともと伝道師の女性2名により「境の谷」に建てられた神学部学生のための寮であったが、戦災により焼失し、神学部が青山学院に統合されたこともあり、戦後は坂田先生のご自宅の前に建て直されて、三崎方面の高等商学部の学生数名が生活する寮となった。

#### ◆ニューズレターNo.20収録記事に関する訂正

P. 16 檀檉寮（東京学院）下請金式1155円（誤）→下請金2355円（正）

P. 17 葉山学寮 1962-1974（誤）→ 1965-1977（正）

葉山学寮 1965-1977 に関して別資料（1956か？）

『関東学院大学30年の歩み』P. 268-269

かくして昭和31年4月1日を以て啓佑学園は関東学院葉山小学校となり、同時に坂田院長の希望により本館施設を拡充して学生生徒の修養、研修場として葉山学寮が発足することとなった。

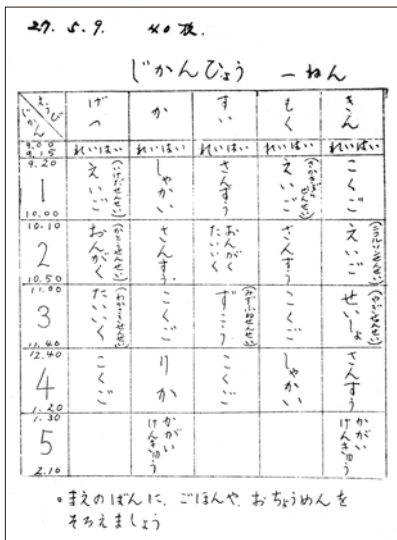
P. 39 典拠 軽井沢山荘 (1) 百年史 679-680トル 941. 967追加

葉山学寮 (3-8) その他 (8) 関東学院大学30年の歩み P. 268-269追加

檀檉寮 (1) 百年史 669-670トル

◆典拠資料

学寮	出典	<1>関東学院百年史	<2>関東学院125年史	<3>関東学院大学30年の歩み	<4>-<21> その他
大学		p.464-489、571-653	p.73-97	p.71-180	<4> 関東学院大学50年史
女子短期大学 (短期大学部・短大)		p.477-479、699-767	p.129-141	p.247-250	<5> 短大30年記念誌 <6> 関東学院女子教育40年の歩み <7> 関東学院女子教育50年の歩み (17) 覚え書(女子短大同窓会 香葉会) (19) 学院史資料室ニュース・レターNo.4
中学校高等学校 (中学部)		p.490-513、785-840、1009	p.143-176	p.251-252	<8> この丘にたつて(中高80年史) (19) 学院史資料室ニュース・レターNo.4
六浦中学校・ 高等学校		p.513-520、785-792、841-878	p.177-202	p.253-256	<9> 30年史(六中高) (10) 40年史(六中高) (11) 50年のあゆみ(六中高)
小学校		p.520-521、791、923-957	p.203-218	p.257-259	(12) 関東学院小学校の40年 (13) 創立55周年記念誌(小) (19) 学院史資料室ニュース・レターNo.8
六浦小学校		p.521-522、791、958-978	p.218-233	p.260-261	(14) 30年記念誌(六小) (15) 目で見ると40年の歩み(六小) (19) 学院史資料室ニュース・レターNo.8
葉山小学校		p.524、944-957	p.208-209	p.268-269	(19) 学院史資料室ニュース・レターNo.8
六浦こども園 (幼稚園)		p.522-523、763、979-987、 990-992	p.233-239	p.262-263	(18) こえだ V(教会幼稚園) (19) 学院史資料室ニュース・レターNo.6
のびのびのば園 (野庭幼稚園)		p.523-524、987-990	p.239-245	p.264-265	(19) 学院史資料室ニュース・レターNo.7
その他		p.128/日本バプテスト神学校 p.414-415、P.420/航空工業専門学校 p.420-423、P.576/工業専門学校 p.423、P.576/経済専門学校 p.423/女子専門学校 p.1008-1009/英語学校	口絵/三つの源流 p.9/日本バプテスト神学校 p.89-90/基督教研究所 p.129-132 /女子専門・女子高等学校	p.266-267/商工高等学校	<6> 関東学院女子教育40年の歩み (16) 三緑 商工33年の歩み (20) 関東学院小史/坂田祐胸像 (21) 学報/坂田記念館



◆事務資料

左の資料は関東学院小学校設立当時(1952年)に児童に配布された一学年用の時間割です(関東学院小学校提供)。  
 こくご、さんすう、すこう、たいいく、などの科目に加えて、せいしよ、えいごという科目が記されています。  
 1950年代に小学校一年生に英語教育を行っていた関東学院の教育の一端がうかがえる資料です。

◆学院史資料・情報提供のお願い

卒業生、修了生、元教職員の皆さまには学院に関する資料・情報の提供をお願いしております。従来より資料の寄贈をお願いしておりました。  
 昨年度より、デジタルアーカイブの構築のためのデータを収集する目的で皆さまより資料を借用して電子データを作成し、データ登録する業務も行っております。お借りした資料は処理が終わりましたら返却させていただきます。(従来の寄贈も受けつけております)  
 お手元にあります学生時代のお写真や学院のパンフレット、式典の配布物など、大切な記録かと思いますが学院史資料の収集にご協力いただけますよう、お願いいたします。

編集後記

第3の源流である中学関東学院が設立されたのは1919年1月27日です。中学関東学院設立から100周年を迎える2019年を前に、学院各校の創立時の記録をテーマとして掲載しました。そして、中学関東学院の初代学院長である坂田祐先生と学院に関する資料が所蔵されている『坂田記念館』の紹介を兼ねて、展示されている写真と所蔵する資料を『坂田祐の足跡』『坂田記念館所蔵資料』として特集しております。  
 坂田記念館は坂田先生が召天された後にご遺族の方々のご協力で開館されました。先生の遺品となった多くの資料と愛用されていた品々が展示されています。坂田先生の歴史は学院の歴史と共通する部分が多く、坂田先生を研究される皆様に教養を受けて特集号を発行することができました。研究者の皆様のご支援に深く感謝いたします。  
 2019年12月16日には坂田祐先生の50年祭を、翌2020年には先生の著作権が失効する一般に言われる「没後50年」(著作権期間である50年が満了したことを示す用語)を迎えます。現在、多くの私立学校がデジタルアーカイブを構築して、創設の歴史に関わる資料を公開する方向にあり、創設者の「没後50年」を機に執筆資料・功績をアーカイブで公開する機関もあります。  
 資料室においても、坂田先生に関する資料を後世に残し、何れはデジタルアーカイブで提供することを視野に入れて坂田記念館資料の電子化作業(保存目的)を進めてきました。「没後50年」を迎えることで煩雑な許諾手続き等でご遺族にご負担をかけることなく、坂田先生の執筆された資料を公開(編集)することが可能となります。  
 公開に向けての調査対応(資料内容の吟味、公開が不適切な部分に墨入れ)は必要ですが、学院の歴史や横浜におけるキリスト教教育の歴史を公開提供することは、長きにわたり横浜の地でキリスト教教育を続けてきた本学院の社会貢献の一つです。また、資料保存目的における電子化作業は重要で、インクの色が褪せる前に書簡、日記、学校教育に関する記録資料、発行文書の記録を電子化して長期保存を可能にできます。  
 学院史資料室では公開に向けての作業と並行して、記録誌の発行や自校史教育などで学院各校に利用いただける資料を充実させ、提供できるよう努めてまいります。一層のご支援をお願いいたします。  
 ※ 電子化中の資料の参照、実資料の閲覧は準備手続き中です。複写や保存資料の閲覧はできません。  
 学院史資料室 外崎みゆき

# 坂田記念館 案内



開館時間 月～金 9:00～16:00  
 休館日 土・日・祝日/学校休校日(春・夏・冬)  
 交通案内 京浜急行 黄金町駅下車、徒歩約5分  
 横浜市営地下鉄 阪東橋駅下車、徒歩約8分

※ 学校行事等により変更の場合があります  
 見学をご希望の場合は事前にお問合せください

**学校法人関東学院 坂田記念館**  
 〒232-0002 横浜市南区三春台4-1  
 TEL 045-262-1003